南地心中

泉鏡花

一

「今のは、」

初阪ものの赤毛布、という処を、十月の半ば過ぎ、小春凪で、ちと逆上せるほどな暖かさに、下着さえ襲ねて重し、野暮な縞も隠されず、頬被りがわりの鳥打帽で、朝から見物に出掛けた……この初阪とは、伝え聞く、富士、浅間、大山、筑波、はじめて、出立つを初山と称うるに倣って、大阪の地へ初見参という意味である。

その男が、天満橋を北へ渡越した処で、同伴のもの

に聞いた。

「今のは？」

「大阪城でございますさ。」

と片頬笑みでわざと云う。結城の藍微塵の一枚着、唐桟柄の袷羽織、茶献上博多の帯をぐいと緊め、白柔皮の緒の雪駄穿で、髪をすっきりと刈った、気の利いた若いもの、風俗は一目で知れる……俳優部屋の男衆で、初阪ものには不似合な伝法。

「まさか、天満の橋の上から、淀川を控えて、城を見て――当人寝が足りない処へ、こう照つけられて、道頓堀から千日前、この辺の沸くり返る町の中を見物

だから、茫(ぼう)となって、夢を見たようだけれど、それだって、大阪に居る事は確(たしか)に承知の上です——言わなくっても大阪城だけは分ろうじゃないか。」

「御道理(ごもっとも)で、ふふふ、」

男衆はまた笑いながら、

「ですがね、欄干へ立って、淀川堤を御覧なさると、貴方(あなた)、恍惚(うっとり)とおなんなさいましたぜ。熟(じっ)と考え込んでおしまいなすって、何かお話しするのもお気の毒なような御様子ですから、私も黙(だんま)りでね。ええ、……時間の都合で、そちらへは廻らないまでも、網島の見当は御案内をしろって、親方に吩咐(いいつ)かって参ったんで、あ

すこで一ツ、桜宮から網島を口上で申し上げようと思っていたのに、あんまり腕組をなすったんで、いや、案内者、大きに水を見て涼みました。

それから、ずっと黙りで、橋を渡った処で、（今のは、）とお尋ねなさるんでさ、義理にも大阪城、と申さないじゃ、第一日本一の名城に対して、ははは、」ともののありげにちょっと顔を見る。

初阪は鳥打の庇（ひさし）に手を当て、

「分りましたよ。真田幸村（さなだゆきむら）に対しても、決して粗略には存じません。萌黄色（もえぎいろ）の海のような、音に聞いた淀川が、大阪を真二つ（まっぷた）に分けたように悠揚（ゆっくり）流れる。

電車の塵（ちり）も冬空です……澄透（すみとお）った空に晃々（きらきら）と太陽（ひ）が照って、五月頃の潮（うしお）が押寄せるかと思う人通りの激しい中を、薄い霧一筋、岸から離れて、さながら、東海道で富士を視（なが）めるように、あの、城が見えたっけ。川蒸汽の、ばらばらと川浪を蹴（け）るのなんぞは、高櫓（たかやぐら）の瓦（かわら）一枚浮かしたほどにも思われず、……船に掛けた白帆くらいは、城の壁の映るのから見れば、些細（ささい）な塵です。

その、空に浮出したような、水に沈んだような、そして幻のような、そうかと思うと、歴然（ありあり）と、ああ、あれが、嬰児（あかんぼ）の時から桃太郎と一所にお馴染（なじみ）の城か、と

思って見ていると、城のその屋根の上へ、山も見えぬのに、鵺（ぬえ）が乗って来そうな雲が、真黒（まっくろ）な壁で上から圧附（おしつ）けるばかり、鉛を熔（と）かして、むらむらと湧懸（わきかか）って来たろうではないか。」

初阪は意気を込めて、杖（ステッキ）をわきに挟んで云った。

二

七筋ばかり、工場の呼吸（いき）であろう、黒煙（くろけむり）が、こう、風がないから、真直（まっすぐ）に立騰（たちのぼ）って、城の櫓（やぐら）の棟を巻いて、その蔽被（おおいかぶさ）った暗い雲の中で、末が乱れて、むらむら

と崩立(くずれた)って、倒(さかさま)に高く淀川の空へ靡(なび)く。……

　なびくに脈を打って、七筋ながら、処々(ところどころ)、斜めに太陽の光を浴びつつ、白泡立てて渦(うずま)いた、その凄(すご)かった事と云ったら。

　天守の千畳敷へ打込んだ、関東勢の大砲(おおづつ)が炎を吐いて転がる中に、淀君をはじめ、夥多(あまた)の美人の、練衣(ねりぎぬ)、紅(くれない)の袴(はかま)が寸断々々(ずたずた)に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える。……雲を貫く、工場の太い煙は、丈に余る黒髪が、縺(もつ)れて乱れるよう、そして、倒(さかさま)に立ったのは、長(とこしえ)に消えぬ人々の怨恨(うらみ)と見えた。

　大河(おおかわ)の両岸(りょうぎし)は、細い樹の枝に、薄紫の靄(もや)が、すらす

ら。蒼空(あおぞら)の下を、矢輻(やぼね)の晃々(きらきら)と光る車が、駈(か)けてもいたのに、……水には帆の影も澄んだのに、……どうしてその時、大阪城の空ばかり暗澹(あんたん)として曇ったろう。

「ああ、あの雲だ。」

と初阪は橋の北詰に、ひしひしと並んだ商人家(あきんどや)の、軒の看板に隠れた城の櫓(やぐら)の、今は雲ばかりを、フト仰いだ。

が、俯向(うつむ)いて、足許(あしもと)に、二人連立つ影を見た。

「大丈夫だろうかね。」

「雷様ですか。」

男衆は逸早(いちはや)く心得て、

「串戯じゃありませんぜ。何の今時……」
「そんなら可いが、」
歩行出す、と暗くなり掛けた影法師も、烈しい人脚の塵に消えて、天満筋の真昼間。
初阪は晴やかな顔をした。
「凄かったよ、私は。……その癖、この陽気だから、自然と淀川の水気が立つ、陽炎のようなものが、ひらひらと、それが櫓の面へかかると、何となく、※[#「火＋發」、450-1]と美しい幻が添って、城の名を天下に彩っているように思われたっけ。その花やかな中にも、しかし、長い、濃い、黒髪が潜んで、滝のように動い

ていた。」
　城を語る時、初阪の色酔えるがごとく、土地馴（な）れぬ足許は、ふらつくばかり危（あやぶ）まれたが、対手（あいて）が、しゃんと来いの男衆だけ、確（たしか）に引受けられた酔漢（よっぱらい）に似て、擦合い、行違う人の中を、傍目（わきめ）も触（ふ）らず饒舌（しゃべ）るのであった。
「時に、それについて、」
「あの、別嬪（べっぴん）の事でしょう。私たちが立停（たちど）まって、お城を見ていました。四五間さきの所に、美しく立って、同じ方を視（なが）めていた、あれでしょう。……貴方（あなた）が（今のは！）ッて一件は。それ、奴（やっこ）を一人、お供に連れて、」

「奴を……十五六の小間使だぜ。」

「当地じゃ、奴ッてそう言います。島田髷に白丈長をピンと刎ねた、小凜々しい。お約束でね、御寮人には附きものの小女ですよ。あれで御寮人の髷が、元禄だった日にゃ、菱川師宣えがく、というんですね。

何だろう、とお尋ねなさるのは承知の上でさ、……また、今のを御覧なすって、お聞きなさらないじゃ、大阪が怨みます。」

「人が悪いな、この人は。それまで心得ていて、はぐらかすんだから。（大阪城でございます、）はちと癪だろうじゃないか。」

「ははは。」

「しかし縁のない事はない。そうして、熟（じっ）とあの、煙の中の凄（すご）い櫓を視（なが）めていると、どうだろう。四五間前（さき）に、上品な絵の具の薄彩色（うすさいしき）で、彳（たたず）んでいた、今の、その美人の姿だがね、……淀川の流れに引かれた、私の目のせいなんだろう。スッと向うに浮いて行って、遠くの、あの、城の壁の、矢狭間（やざま）とも思う窓から、顔を出して、こっちを覗（のぞ）いた。そう見えた。いつの間にか、城の中へ入って、向直って。……

黒雲の下、煙の中で、凄いの、美しいの、と云ッて、そりゃなかった。」

三

「だから、何だか容易ならん事が起った、と思って、……口惜(くや)しいが聞くんです。実はね、昨夜(ゆうべ)、中座を見物した時、すぐ隣りの桟敷(さじき)に居たんだよ、今の婦人(おんな)は……」と頷(うなず)くようにして初阪は云う。

男衆はまた笑った。

「ですとも。それを知らん顔で、しらばっくれて、唯今一見(ただいまいちげん)という顔をなさるから、はぐらかして上げま

したんでさ。」

「だって、住吉（すみよし）、天王寺も見ない前（さき）から、大阪へ着いて早々、あの婦（おんな）は？　でもあるまいと思う。それじゃ慌て過ぎて、振袖に躓（けつまず）いて転ぶようだから、痩我慢（やせがまん）で黙然（だんまり）でいたんだ。」

「ところが、辛抱が仕切れなくなったでしょう、ごもっともですとも。親方もね、実は、お景物にお目に掛ける、ちょうど可（い）いからッて、わざと昨夜（ゆうべ）も、貴方（あなた）を隣桟敷へ御案内申したんです。

附込（つけこ）みでね、旦那と来ていました。取巻きに六七人芸妓（げいこ）が附いて。」

男衆の顔を見て、
「はあ、すると堅気かい、……以前はとにかく、」
また男衆は、こう聞かれるのを合点（がってん）したらしく頷（うなず）くのであった。
「貴方、当時また南新地から出ているんです。……いいえ、旦那が変ったんでも、手が切れたのでもありません。やっぱり昨夜（ゆうべ）御覧なすった、あれが元からの旦那でね。ええ、しかも、ついこの四五日前まで、久しく引かされて、桜の宮の片辺（かたほとり）というのに、それこそ一枚絵になりそうな御寮人で居たんですがね。あの旦那の飛んだもの好（ずき）から、洒落（しゃれ）にまた鑑札を請けて、以前

のままの、お珊(さん)という名で、新しく披露(ひろめ)をしました。」
と質実(じみ)に話す。
「阪地(かみがた)は風流だね、洒落に芸者に出すなんざ、悟ったもんですぜ、根こぎで手活(ていけ)にした花を、人助けのため拝ませる、という寸法だろう。私なんぞも、お庇(かげ)で土産にありついたという訳だ。」
「いいえ、隣桟敷の緋(ひ)の毛氈(もうせん)に頬杖(ほおづえ)や、橋の欄干袖振掛けて、という姿ぐらいではありません。貴方、もっと立派なお土産を御覧なさいましょうよ。御覧なさいまし、明日、翌々日(あさって)の晩は、唯今のお珊の方が、千日前から道頓堀、新地をかけて宝市の練(ねり)に出て、下げ髪、

緋の袴という扮装で、八年ぶりで練りますから。」
一言、下げ髪、緋の袴、と云ったのが、目のあたり城の上の雲を見た、初阪の耳を穿って響いた。
「何、下げ髪で、緋の袴？……」
「勿論一人じゃありません——確か十二人、同じ姿で揃って練ります。が、自分の髪を入髪なしに解ほぐして、その緋の袴と擦れ擦れに丈に余るってのは、あの婦ばかりだと云ったもんです。一度引いて、もうそんなに経ちますけれども、私あ今日も、つい近間で見て驚きました。
苦労も道楽もしたろうのに、雁金額の生際が、一厘

だって抜上がっていませんやね、ねえ。
やっぱり入髪なしを水で解いて、宝市は屋台ぐるみ、象を繋いで曳きましょうよ。
旦那もね、市に出して、お珊さんのその姿を、見たり、見せたりしたいばかりに、素晴らしく派手を遣って、披露をしたんだって評判です。
その市女は、芸妓に限るんです。それも芸なり、容色なり、選抜きでないと、世話人の方で出しませんから……まず選ばれた婦は、一年中の外聞といったわけです。
その中のお職だ、貴方。何しろ大阪じゃ、浜寺の魚

市には、活きた竜宮が顕れる、この住吉の宝市には、天人の素足が見えるって言います。一年中の紋日ですから、まあ、是非お目に掛けましょう。

貴方、一目見て立すくんで、」

「立すくみは大袈裟だね、人聞きが悪いじゃないか。」

「だって、今でさえ、悚然なすったじゃありませんかね。」

四

男衆の浮かせ調子を、初阪はなぜか沈んで聞く。…

……

「まったくそりゃ悚然（ぞっ）としたよ。ひとりでに、あの姿が、城の中へふいと入って、向直って、こっちを見るらしい気がした時は。

黒い煙も、お珊さんか、……その人のために空に被（かぶ）さったように思って。

天満の鉄橋は、瀬多の長橋ではないけれども、美濃（みの）へ帰る旅人に、怪しい手箱を託（ことづ）けたり、俵藤太（たわらとうだ）に加勢を頼んだりする人に似たように思ったのだね。

由来、橋の上で出会う綺麗な婦（おんな）は、すべて凄（すご）いとしてある。——

が、場所によるね……昨夜（ゆうべ）、隣桟敷で見た時は、同じその人だけれど、今思うと、まるで、違った婦（おんな）さ。……君も関東ものだから遠慮なく云うが、阪地（かみがた）の婦（おんな）はなぜだろう、生きてるのか、死んでるのか、血というものがあるのか知らん、と近所に居るのも可厭（いや）なくらい、酷（ひど）く、さました事があったんだから……」

「へい、何がございました。やたらに何か食べたんですかい。」

「何、詰（つま）らんことを……そうじゃない。余りと言えば見苦しいほど、大入芝居の桟敷だというのに、旦那かね、その連（つれ）の男に、好三昧（すきざんまい）にされてたからさ。」

「そこは妾もののの悲しさですかね。どうして……当人そんなぐうたらじゃない筈です。意地張りもちっと可恐いような婦でね。以前、芸妓で居ました時、北新地、新町、堀江が、一つ舞台で、芸較べを遣った事があります。その時、南から舞で出ました。もっとも評判な踊手なんですが、それでも他場所の姉さんに、ひけを取るまい。……その頃北に一人、向うへ廻わして、ちと目に余る、家元随一と云う名取りがあったもんですから、生命がけに気を入れて、舞ったのは道成寺。貴方、そりゃ近頃の見ものだったと評判しました。

能がかりか、何か、白の鱗の膚脱ぎで、あの髪を颯

と乱して、ト撞木を被って、供養の鐘を出た時は、何となく舞台が暗くなって、それで振袖の襦袢を透いて、お珊さんの真白な胸が、銀色に蒼味がかって光ったって騒ぎです。

そのかわり、火のように舞い澄まして楽屋へ入ると、気を取詰めて、ばったり倒れた。後見が、回生剤を呑まそうと首を抱く。一人が、装束の襟を寛げようと、あの人の胸を開けたかと思うと、キャッと云って尻持をついたはどうです。

鳩尾を緊めた白羽二重の腹巻の中へ、生々とした、長いのが一尾、蛇ですよ。畝々と巻込めてあった、そ

いつが、のッそり、」と慌（あわただ）しい懐手、黒八丈を襲（かさ）ねた襟から、拇指（おやゆび）を出して、ぎっくり、と蝮（まむし）を拵（こさ）えて、肩をぶるぶると遣って引込（ひっこ）ませて、

「鎌首を出したはどうです、いや聞いても恐れる。」とばたばたと袖を払（はた）く。

　初阪もそれはしかねない婦（おんな）と見た。

「執念の深いもんだから、あやかる気で、生命（いのち）がけの膚（はだ）に絡（まと）ったというわけだ。」

「それもあります。ですがね、心願も懸けたんですとさ。何でも願が叶（かな）うと云います……呪詛（のろい）も、恋も、情（なさけ）も、慾（よく）も、意地張も同じ事。……その時鳩尾（みずおち）に巻いて

いたのは、高津(こうづ)辺の蛇屋で売ります……大瓶(おおがめ)の中にぞろぞろ、という一件もので、貴方御存じですか。」

初阪は出所を聞くと悚然(ぞっ)とした。我知らず声を潜(ひそ)めて、

「知ッてる……生紙(きがみ)の紙袋(かんぶくろ)の口を結えて、中に筋張った動脈のようにのたくる奴(やつ)を買って帰って、一晩内に寝かしてそれから高津の宮裏の穴へ放すんだってね。」

五

「ええ、そうですよ。その時、願事(ねがいごと)を、思込んで言聞

かせます。そして袋の口を解（ほど）くと、によろによろと這出（はいだ）すのが、きっと一度、目の前でとぐろを巻いて、首を擡（もた）げて、その人間の顔を熟（じっ）と視（み）て、それから横穴へ入って隠れるって言います。

　そのくらい念の入（い）った長虫ですから、買手が来て、蛇屋が貯えたその大瓶（おおがめ）の圧蓋（おしぶた）を外すと、何ですとさ。黒焼の註文の時だと、うじゃうじゃ我一（われいち）に下へ潜って、瓶の口がぐっと透く。……放される客の時だと、ぬらぬら争って頭を上げて、瓶から煙が立つようですって、……もし、不気味ですねえ。」

　初阪は背後（うしろ）ざまに仰向（あおむ）いて空を見た。時に、城の雲

は、賑(にぎや)かな町に立つ埃(ほこり)よりも薄かった。

思懸(おもいが)けず、何の広告か、屋根一杯に大きな布袋(ほてい)の絵があって、下から見上げたものの、さながら唐子(からこ)めくのに、思わず苦笑したが、

「昨日(きのう)もその話を聞きながら、兵庫の港、淡路島、煙突の煙でない処は残らず屋根ばかりの、大阪を一目に見渡す、高津の宮の高台から……湯島の女坂に似た石の段壇を下りて、それから黒焼屋の前を通った時は、軒から真黒(まっくろ)な氷柱(つらら)が下ってるように見えて冷(ひや)りとしたよ。一時(いっとき)に寒くなって——たださえ沸上(にえあが)り湧立(わきた)ってる大阪が、あのまた境内に、おでん屋、てんぷら屋、煎豆屋(いりまめや)、

とかっかっぐらぐらと、煮立て、蒸立て、焼立てて、それが天火に曝(さら)されているんだからね——びっしょり汗になったのが、お庇(かげ)ですっかり冷くなった。但し余り結構なお庇ではないのさ。

大阪へ来てから、お天気続きだし、夜は万燈の中に居る気持だし、何しろ暗いと思ったのは、町を歩行(ある)く時でも、寝る時でも、黒焼屋の前を通った時と、今しがた城の雲を見たばかりさ。」

男衆は偶(ふ)と言(ことば)を挟んで、

「何を御覧なさる。」

「いいえね、今擦違った、それ、」

とちょっと振向きながら、
「それ、あの、忠兵衛の養母（おふくろ）といった隠居さんが、紙袋（かんぶくろ）を提げているから、」
「串戯（じょうだん）じゃありません。」
「私は例のかと思った、……」
「ありゃ天満の亀（かめ）の子煎餅（こせんべい）、……成程亀屋の隠居でしょう。誰が、貴方、あんな婆さんが禁厭（まじない）の蛇なんぞを、」
「ははあ、少（わか）いものでなくっちゃ、利かないかね。」
「そりゃ……色恋の方ですけれど……慾（よく）の方となると、無差別ですから、老年（としより）はなお烈しいかも知れません。

分けてこの二三日は、黒焼屋の蛇が売れ盛るって言います……誓文払(せいもんばらい)で、大阪中の呉服屋が、年に一度の大見切売をしますんでね、市中もこの通りまた別して賑(にぎわ)いまさ。

心斎橋筋の大丸なんかでは、景物の福引に十両二十両という品ものを発奮(はず)んで出しますんで、一番引当てよう了簡(りょうけん)で、禁厭(まじない)に蛇の袋をぶら下げて、杖を支(つ)いて、お十夜という形で、夜中に霜を踏んで、白髪(しらが)で橋を渡る婆さんもあるにゃあるんで。」

男衆もちょっと町中（まちなか）を眴（みまわ）した。
「まったくかも知れません、何しろ、この誓文払の前後に、何千条（すじ）ですかね、黒焼屋の瓶（かめ）が空虚（から）になった事があるって言いますから。慾は可恐（おそろ）しい。悪くすると、ぶら提げてるのに打撞（ぶつか）らないとも限りませんよ。」
「それ！　だから云わない事じゃない。」
内端（うちわ）ながら二ツ三ツ杖（ステッキ）を掉（ふ）って、
「それでなくッてさえ、こう見渡した大阪の町は、通（とおり）も路地も、どの家も、かッと陽気に明（あかる）い中に、どこか一個所、陰気な暗い処が潜（ひそ）んで、礼儀作法も、由緒因

縁も、先祖の位牌（いはい）も、色も恋も罪も報（むくい）も、三世相一冊と、今の蛇一疋ずつは、主（ぬし）になって隠れていそうな気がする処へ、蛇瓶の話を昨日（きのう）聞いて、まざまざと爪立足（つまだちあし）で、黒焼屋の前を通ってからというものは、うっかりすると、新造（しんぞ）も年増も、何か下掻（したがい）の褄（つま）あたりに、一条（ひとすじ）心得ていそうでならない。

昨夜（ゆうべ）も、芝居で……」

男衆は思出したように、如才なく一ツ手を拍（う）った。

「時に、どうしたと云うんですえ、お珊さんが、その旦那と？……」

「まあ、お聞き——隣合った私の桟敷に、髪を桃割（ももわれ）に

結って、緋の半襟で、黒繻子（くろじゅす）の襟を掛けた、黄の勝った八丈といった柄の着もの、紬（つむぎ）か何か、絣（かすり）の羽織をふっくりと着た。ふさふさの簪（かんざし）を前のめりに挿して、それは人柄な、目の涼しい、眉の優しい、口許（くちもと）の柔順（すなお）な、まだ肩揚げをした、十六七の娘が、一人入っていたろう。……出来るだけおつくりをしたろうが、着ものも帯も、余りいい家（うち）の娘じゃないらしいのが、」

「居ました。へい、親方が、貴方に差上げた桟敷ですから、人の入る訳はないが、と云って、私が伺いましたっけ。貴方が、（構いやしない。）と仰有（おっしゃ）るし、そこはね、大したお目触りのものではなし……あの通りの

大入で、ちょっと退(ど)けようッて空場(あな)も見つからないものですから、それなりでお邪魔を願ッておきました。

後で聞きますと、出方が、しんせつに、まあ、喜ばせてやろうッて、内々で入れたんだそうで。ありゃ何ですッて、逢阪下(おうざかしも)の辻――ええ、天王寺に行(ゆ)く道です。公園寄の辻に、屋台にちょっと毛の生えたくらいの小さな店で、あんころ餅を売っている娘だそうです。いい娘(こ)ですね。」

それは初阪がはじめて聞く。

「そう、餅屋の姉さんかい……そして何だぜ、あの芝居の厠(べんじょ)に番をしている、爺(じい)さんね、大どんつくを着

た逞(たくま)しい親仁(おやじ)だが、影法師のように見える、太(ひど)く、よぼけた、」

「ええ、駕籠伝(かごでん)、駕籠屋の伝五郎ツて、新地の駕籠屋で、ありゃその昔鳴らした男です。もう年紀(とし)の上に、身体(からだ)を投げた無理が出て、便所の番をしています。その伝が？」

「娘の、爺さんか父親(おやじ)なんだ。」

これは男衆が知らなかった。

「へい、」

「知らないのかい。」

「そうかも知れません、私(わっし)あ御存じの土地児(とちっこ)じゃな

いんですから、見たり、聞いたり、透切(すきぎれ)だらけで。へい、どうして、貴方？」

「ところが分った事がある。……何しろ、私が、昨夜(ゆうべ)、あの桟敷へ入った時、空いていた場所は、その私の処と、隣りに一間(ひとま)、」

「そうですよ。」

「その二間しかなかったんだ。二丁がカチと入った時さ。娘を連れて、年配の出方が一人、横手の通(とおり)の、竹格子だね、中座のは。……扉(ひらき)をツイと押して、出て来て、小さくなって、背後(うしろ)の廊下、お極(きま)りだ、この処へ立つ事無用。あすこへ顔だけ出して踞(しゃが)んだもんです。

（旦那、この娘を一人願われませんでございましょうか。内々のもので、客ではございません。お部屋へ知れますと悪うございますが、貴下様思召で、）と至って慇懃です。

資本は懸らず、こういう時、おのぼりの気前を見せるんだ、と思ったから、さあさあ御遠慮なく、で、まず引受けたんだね。」

七

「ずっと前へお出なさい、と云って勧めても、隅の口

に遠慮して、膝に両袖を重ねて、溢れる八ツ口の、綺麗な友染を、袂へ、手と一所に推込んで、肩を落して坐っていたがね、……可愛らしいじゃないか。赤い紐を緊めて、雪輪に紅梅模様の前垂がけです。

　それでも、幕が開いて芝居に身が入って来ると、身体をもじもじ、膝を立てて伸上って――背後に引込んでいるんだから見辛いさね――そうしちゃ、舞台を覗込むようにしていたっけ。つい、知らず知らず乗出して、仕切にひったりと胸を附けると、人いきれに、ほんのりと瞼を染めて、ほっとなったのが、景気提灯の下で、こう、私とまず顔を並べた。おのぼり心の中

に惟（おも）えらく、光栄なるかな。
まあ、お聞きったら。
そりゃ可（よ）かったが、一件だ。」
「一件と……おっしゃると？」
「長いの、長いの。」
「その娘（こ）が、蛇を……嘘でしょう。」
「間違ったに違いない。けれども高津で聞いて、平家の水鳥で居たんだからね。幕間（まくあい）にちょいと楽屋へ立違って、またもとの所へ入ろうとすると、その娘の袂（たもと）の傍（わき）に、紙袋（かんぶくろ）［＃「紙袋」は底本では「紙装」］が一つ出ています。

並んで坐ると、それがちょうど膝になろうというんだから、大（おおい）に怯（ひる）んだ。どうやら気のせいか、むくむく動きそうに見えるじゃないか。

で、私は後へ引退（ひきさが）った。卜娘の挿した簪（かんざし）のひらひらする、美しい総（ふさ）越しに舞台の見えるのが、花輪で額縁を取ったようで、それも可（よ）さ。

所へ、さらさらどかどかです。荒いのと柔（やわらか）なのと、急ぐのと、入乱れた跫音（あしあと）を立てて、七八人。小袖幕で囲ったような婦（おんな）の中から、赫（かっ）と真赤（まっか）な顔をして、痩（や）せた酒顚童子（しゅてんどうじ）という、三分刈りの頭で、頬骨の張った、目のぎょろりとした、なぜか額の暗い、殺気立った男

が、詰襟の紺の洋服で、靴足袋を長く露した服筒を膝頭にたくし上げた、という妙な扮装で、その婦たち、鈍太郎殿の手車から転がり出したように、ぬっと発奮んで出て、どしんと、音を立てて躍込んだのが、隣の桟敷で……

唐突、横のめりに両足を投出すと、痛いほど、前の仕切にがんと支いた肱へ、頭を乗せて、自分で頸を摑んでも、そのまま仰向けにぐたりとなる、可いかね。

顔へ花火のように提灯の色がぶツかります。天井と舞台を等分に睨み着けて、（何じゃい！）と一つ怒鳴る、と思うと、かっと云う大酒の息を吐きながら、（こら、

入らんか、）と喚いたんだ。
　背後に、島田やら、銀杏返しやら、累って立った徒は、右の旦那よりか、その騒ぎだから、皆が見返る、見物の方へ気を兼ねたらしく、顔を見合わせていたっけが。
　この一喝を啖うと、べたべたと、蹴出しも袖も崩れて坐った。
　大切な客と見えて、若衆が一人、女中が二人、前茶屋のだろう、附いて来た。人数は六人だったがね。旦那が一杯にのしてるから、どうして入り切れるもんじゃない。随分肥ったのも、一人ならずさ。

茶屋のがしきりに、小声で詫(わび)を云って叩頭(おじぎ)をしたのは、御威勢でもこの外に場所は取れません、と詫びたんだろう。(構いまへんで、お入りなされ。)

まずい口真似だ、」

初阪は男衆の顔を見て微笑(ほほえ)んだが、

「そう云って、茶屋の男が、私に言(ことば)も掛けないで、その中でも、なかんずく臀(しり)の大きな大年増を一人、こっちの場所へ送込んだ。するとまたその婦(おんな)が、や、どッこいしょ、と掛声して、澄まして、ぬっと入って、ふわりと裾埃(すそごみ)で前へ出て、正面充満(いっぱい)に陣取ったろう。」

八

「娘はこの肥満女（ふとっちょ）に、のしのし隅っこへ推着（おッつ）けられて、可恐（おそろ）しく見勝手が悪くなった。ああ、可哀そうにと思う。ちょうど、その身体（からだ）が、舞台と私との中垣になったもんだからね。可憐（いじら）しいじゃないか……

　密（そっ）と横顔で振向いて、俯目（ふしめ）になって、（貴下（あんた）はん、見憎うおますやろ、）と云って、極（きま）りの悪そうに目をぱちぱちと瞬いたんです。何事も思いません。大阪中の詫言（わびごと）を一人でされた気がしたぜ。」

　男衆は頭（つむり）を下げた。

「御道理（ごもっとも）で。」

「いや、まったく。心配しないで楽に居て、御覧々々と重ねて云うと、芝居で泣いたなりのしっとりした眉（まみえ）を、嬉しそうに莞爾（にっこり）して、向うを向いたが、ちょっと白い指で圧（おさ）えながら、その花簪（はなかんざし）を抜いたはどうだい。染分（そめわけ）の総（ふさ）だけも、目障りになるまいという、しおらしいんだね。

（酒だ、酒だ。疾（はや）くせい、のろま！）とぎっくり、と胸を張反（はりそ）らして、目を剝（む）く。こいつが、どろんと濁って血走ってら。ぐしゃぐしゃ見上げ皺（しわ）が揉上（もみあが）って筋だらけ。その癖、すぺりと髯（ひげ）のない、まだ三十くらい、

若いんです。

（はいはい、たった今、直（じ）きに、）とひょこひょこと敷居に擦附ける、若衆は叩頭（おじぎ）をしいしい、（御寮人様、行届きまへん処は、何分、）と、こう内証で云った。

その御寮人と云われた、……旦那の背後（うしろ）に、……髪はやっぱり銀杏返しだっけ……お召の半コオトを着たなりで控えたのが、」

「へい、成程、背後（うしろ）に居ました。」

「お珊の方（かた）かね、天満橋で見た先刻（さっき）のだ。もっとも東の雛壇（ひなだん）をずらりと通して、柳桜が、色と姿を競った中にも、ちょっとはあるまいと思う、容色（きりょう）は容色と見た

けれども、歯痒(はがゆ)いほど意気地(いくじ)のない、何て腑(ふ)の抜けた、と今日より十段も見劣りがしたって訳は。……

いずれ妾(めかけ)だろう。慰まれものには違いないが、若い衆も、（御寮人、）と奉って、何分、旦那を頼む、と云う。

取巻きの芸妓(げいしゃ)たち、三人五人の手前もある。やけに土砂を振掛けても、突張(つッぱり)返った洋服の亡者一個(ひとり)、掌(てのひら)に引丸(ひんまろ)げて、捌(さばき)を附けなけりゃ立ちますまい。

ところが不可(いけな)い。その騒ぐ事、暴れる事、桟敷へ狼を飼ったようです。（泣くな、わい等、）と喚(わめ)く——君の親方が立女形(たておやま)で満場水を打ったよう、千百の見物が、

目も口も頭も肩も、幅の広いただ一人（にん）の形になって、啜泣（すすりな）きの声ばかり、誰が持った手巾（ハンケチ）も、夜会草の花を昼間見るように、ぐっしょり萎（しぼ）んで、火影の映るのが血を絞るような処だっけ——（芝居を見て泣く奴があるものかい、や、怪体（けたい）な！

　舞台でも何を泣（ほ）えくさるんじゃやい。かッと喧嘩（けんか）を遣れ、面白うないぞ！　打殺（たたきころ）して見せてくれ。やい、腸（はらわた）を摑出（つかみだ）せ、へん、馬鹿な、）とニヤリと笑う。いや、そのね、ニヤリと北叟笑（ほくそえ）みをする凄（すご）さと云ったら。……待てよ、この御寮人が内証（ないしょ）で情人（いろ）をこしらえる。嫉妬（しっと）でその妾の腸（はらわた）を引摺（ひきず）り出す時、きっと、そんな

笑い方をする男に相違ないと思った。

可哀(あわれ)を留(とど)めたのは取巻連さ。

夢中になって、芝居を見ながら、旦那が喚(わめ)くたびに、はっとするそうで、皆(みんな)が申合わせた形で、ふらりと手を挙げる。……片手をだよ。……こりゃ、私の前を塞(ふさ)いだ肥満女(ふとっちょ)も同じく遣った。

その癖、黙然(だんまり)でね、チトもしお静(しずか)に、とも言い得ない。

すると、旦那です……(馬鹿め、止(や)めちまえ、)と言いながら、片手づきの反身(そりみ)の肩を、御寮人さ、そのお珊の方の胸の処へ突(つき)つけて、ぐたりとなった。……右

の片手を逆に伸して、引合せたコオトの襟を引摑（ひッつか）んで、何か、自分の胸が窮屈そうに、こう踠（もが）いて、引開（ひっぱだ）けようとしたんだがね、思う通りにならなかったもんだから、（ええ）と云うと、かと開（はだ）けた、細い黄金鎖（きんぐさり）が晃然（きらり）と光る。帯を摑んで、ぐい、と引いて、婦（おんな）の膝を、洋服の尻へ搔込（かいこ）んだりと思うと、もろに凭懸（もたれかか）った奴が、ずるずると辷（すべ）って、それなり真仰向（まあおむ）けさ。傍若無人だ。」

九

「膝枕をしたもんです。その野分(のわき)に、衣紋(えもん)が崩れて、褄(つま)が乱れた。旦那の頭は下搔(したがい)の褄を裂いた体(てい)に、紅入友染(べにいりゆうぜん)の、膝の長襦袢(ながじゅばん)にのめずって、靴足袋をぬいと二ツ、仕切を空へ突出したと思え。

大蛇のような鼾(いびき)を搔(か)く。……妾(めかけ)はいいなぶりものにされたじゃないか。私は浅ましいと思った。大入の芝居の桟敷で。

江戸児(えどっこ)だと、見たが可い！　野郎がそんな不状(ぶざま)をすると、それが情人(いろ)なら簪(かんざし)でも刺殺す……金子(かね)で売った身体(からだ)だったら、思切って、衝(つっ)と立って、袖を払って帰るんだ。

処を、どうです。それなりに身を任せて、静（じっ）として、しかも入身（いれみ）に娜々（なよなよ）としているじゃないか。摑寄（つかみよ）せられた帯も弛（ゆる）んで、結び目のずるりと下った、扱帯（しごき）の浅葱（あさぎ）は冷たそうに、提灯の明（あかり）を引いて、寂しく婦（おんな）の姿を庇（かば）う。それがせめてもの思遣（おもいや）りに見えたけれども、それさえ、そうした度の過ぎた酒と色に血の荒びた、神経のとげとげした、狼の手で摑出された、青光（あおびかり）のする腸（はらわた）のように見えて、あわれに無慚（むざん）な光景（ようす）だっけ。」

「……へい、そうですかね、」と云った男衆の声は、なぜか腑（ふ）に落ちぬらしく聞えたのである。

「聞きや、道成寺を舞った時、腹巻の下へ蛇を緊(し)めた姉さんだと云うじゃないか。……その扱帯(しごき)が鎌首を擡(もた)げりゃ可(よ)かったのにさ。」

「まったくですよ。それがために、貴方ね、舞の師匠から、その道成寺、葵(あおい)の上などという執着(しゅうぢゃく)の深いものは、立方(たちかた)禁制と言渡されて、破門だけは免れたッて、奥行きのある婦(おんな)ですが……金子(かね)の力で、旦那にゃ自由にならないじゃなりますまいよ。」

「気の毒だね。」

「とおっしゃると、筋も骨も抜けたように聞えますけれど、その癖、随分、したい三昧(ざんまい)、我儘(わがまま)を、するのを、

旦那の方で制し切れないッて、評判をしますがね。」

「金子でその我ままをさせてもらうだけに、また旦那にも桟敷で帯を解かれるような我儘をされるんです。身体（からだ）を売って栄耀（えよう）栄華さ、それが浅ましいと云うんじゃないか。」

「ですがね、」

と男衆は、雪駄（せった）ちゃらちゃら、で、日南（ひなた）の横顔、小首を捻（ひね）って、

「我儘も品（しな）によりまさ。金剛石（ダイヤモンド）や黄金鎖（きんぐさり）なら妾（めかけ）の身じゃ、我儘という申立てにもなりませんがね。

自動車のプウプウも血の道に触（さわ）るか何かで、ある時

なんざ、奴(やっこ)の日傘で、青葉時に、それ女大名の信長公でさ。鳴かずんば鳴かして見しょう、日中(ひなか)に時鳥(ほととぎす)を聞くんだ、という触込(ふれこ)みで、天王寺へ練込みましたさ、貴方。

　幇間(たいこもち)が先へ廻って、あの五重の塔の天辺(てっぺん)へ上って、わなわな震えながら雲雀笛(ひばりぶえ)をピイ、はどうです。

　そんな我儘より、もっと偉いのは、しかもその日だって云うんですがね。

　御堂(みどう)横から蓮(はす)の池へ廻る広場(ひろっぱ)、大銀杏(おおいちょう)の根方に筵(むしろ)を敷いて、すととん、すととん、と太鼓を敲(たた)いて、猿を踊らしていた小僧を、御寮人お珊の方、扇子を半開(はんびらき)

か何かで、こう反身で見ると、（可愛らしいぼんちやな。）で、俳優（やくしゃ）の誰とかに肖（に）てるッて御意の上……（私は人の妾やよって、えらい相違もないやろけれど、畜生に世話になるより、ちっとは優（まし）や。旦那に頼んで出世させて上げる、来なはれ。）と直ぐに貴方。

その場から連れて戻って、否応（いやおう）なしに、旦（だん）を説付（ときつ）けて、たちまち大店（おおだな）の手代分。大道稼ぎの猿廻しを、縞（しま）もの揃いにきちんと取立てたなんぞはいかがで。私は膝を突（ツッ）つく腕に、ちっとは実があると思うんですが。」

初阪はこれを聞くと、様子が違って、

「さあ、事だよ！　すると、昨夜（ゆうべ）のはその猿廻しだ。」

十

「いや、黒服の狂犬は、まだ妾の膝枕で、ふんぞり返って高鼾。それさえ見てはいられないのに、……その手代に違いない。……当時の久松といったのが、前垂がけで、何か急用と見えて、逢いに来てからの狼藉が、まったく目に余ったんだ。

悪口吐くのに、（猿曳め、）と云ったが、それで分った。けずり廻しとか、摺古木とか、獣めとかいう事だろう。大阪では（猿曳）と怒鳴るのかと思ったが。

じゃ、そのお珊の方が取立てた、銀杏の下の芸人に疑いない。

となると!……あの、婦はなお済まないぜ。

自分の世話をした若手代が、目の前で、額を煙管で打たれるのを、もじもじと見ていたろうじゃないか。」

「煙管で、へい?……」

「ああ、垂々と血が出た。それをどうにもし得ないんだ。じゃ、天王寺の境内で、猿曳を拾上げたって何の功にもなりゃしない。

まあね、……旦那は寝たろう。取巻きの芸妓一統、互にほっとしたらしい。が、私に言わせりゃその徒

だって働きがないじゃないか。何のための取巻なんです。ここは腕があると、取仕切って、御寮人に楽をさせる処さね。その柔かい膝に、友染も露出（あらわ）になるまで、石頭の拷問（ごうもん）に掛けて、芝居で泣いていては済みそうもないんだが。

可（よ）しさ、それも。

と、そこへ、酒肴（さかな）、水菓子を添えて運んで来た。するとね、円髷（まげ）に結（い）った仲居らしいのが、世話をして、御連中、いずれもお一ツずつは、いい気なもんです。

さすがに、御寮人は、頭（かぶり）をちょっと振って受けなかった。

それにも構わず……（さあ一ツ。）か何かで、美濃（みの）から近江（おうみ）、こちらの桟敷に溢（あふ）れてる大きなお臀（しり）を、隣から手を伸（のば）して猪口（ちょく）の縁（ふち）でコトコトと音信（おとづ）れると、片手で簪（かんざし）を撮（つま）んで、ごしごしと鬢（びん）の毛を突掻（つッか）き突掻き、ぐしゃりと挫（ひしゃ）げたように仕切に凭（もた）れて、乗出して舞台を見い見い、片手を背後（うしろ）へ伸ばして、猪口を引傾（ひっかたむ）けたまま受ける、注（つ）ぐ、それ、溢（こぼ）す。（わややな、）と云う。

そいつが、私の胸の前で、手と手を千鳥がけに始（はじま）ったんだから驚くだろう。御免も失礼も、会釈一つするんじゃない。

しかし憎くはなかったぜ。君の親方が舞台に出ていて、皆(みんな)が夢中で遣る事なんだ。

憎いのは一人狂犬(やまいぬ)さ。

やっと静まったと思う間もない。

（酒か、）と喚(わめ)くと、むくむくと起(おき)かかって、引担(ひっかつ)ぐような肱(ひじ)の上へ、妾の膝で頭を載せた。

（注げ！　馬鹿めが、）と猪口を叱って、茶碗で、苦い顔して、がぶがぶと掻喫(かっくら)う処へ、……色の白い、ちと繊弱(ひよわ)い、と云った柄さ。中脊の若いのが、縞(しま)の羽織で、廊下をちょこちょこと来て、卜手をちゃんと支(つ)いた。

（何や、）と一ツ突慳貪(つッけんどん)に云って睨(にら)みつけたが、低声(こごえ)で、

若いのが何か口上を云うのを、フーフーと鼻で呼吸(いき)をしながら、目を瞑(ねむ)って、真仰向けに聞いたもんです。（旦那の、）旦那と云うんだ。（旦那のここに居るのがどないして知れた、何や、）とまた怒鳴って、（判然(はっきり)ぬかしおれ。何や？　番頭が……ふ、ふ、ふ、ふん、）と嘲(あざ)けるような、あの、凄(すご)い笑顔(わらいがお)。やがて、苦々しそうに、そして切なそうに、眉を顰(しか)めて、唇を引結(ひんむす)ぶと、グウグウとまた鼾(いびき)を掻出す。

いや、しばらく起きない。

若手代は、膝へ手を支(つ)いたなり、中腰でね、こう困ったらしく俯向(うつむ)いたッきり。女連は、芝居に身が入(い)って

言(ことば)も掛けず。

その中(うち)に幕が閉(しま)った。

満場わッと鳴って、ぎっしり詰(つま)ったのが、真黒(まっくろ)に両方の廊下へ溢れる。

しばらくして、大分鎮(しず)まった時だった。幕あきに間もなさそうで、急足(いそぎあし)になる往来(ゆきき)の中を、また竹の扉(ひらき)からひょいと出たのは、娘を世話した男衆でね。手に弁当を一つ持っていました。

（はいよ、お弁当、）と云って、娘に差出して、渡そうとしたっけが……」

十一

「そこに私も居る、……知らぬ間に肥満女(ふとっちょ)の込入ったのと、振向いた娘の顔とを等分に見較べて（和女(あんた)、極(きまり)が悪いやろ。そしたら私(わし)が方へ来て食(あが)りなはるか。ああ、そうしなはれ、）と莞爾々々(にこにこ)笑う、気の可(い)い男さ。（太(えら)いお邪魔にござります。）と、屈(かが)んで私に挨拶して、一人で合点して弁当を持ったまま、ずいと引退(ひきさが)った。

娘がね、仕切に手を支(つ)くと、向直って、抜いた花簪(はなかんざし)を載せている、涙に濡れた、細(ほっそ)り畳んだ手拭(てぬぐい)を置いた、友染の前垂れの膝を浮かして、ちょっと考え

るようにしたっけ。その手拭を軽く持って、上気した襟のあたりを二つ三つ煽ぎながら、可愛い足袋で、腰を据えて、すっと出て行く。……

私は煙草がなくなったから、背後の運動場へ買いに出た。

余り見かねたから、背後向きになっていたがね、出しなに見ると、狂犬はそのまま膝枕で、例の鼾で、若い手代はどこへ立ったか居なかった。

西の運動場には、店が一つしかない。もう幕が開く処、見物は残らず場所へ坐直している、ここらは大阪は行儀が可いよ。それに、大人で、身の入った芝居ほ

ど、運動場は寂しいもんです。

風は冷（つめた）し、呼吸（いき）ぬきかたがた、買った敷島をそこで吸附けて、喫（ふ）かしながら、堅い薄縁（うすべり）の板の上を、足袋の裏冷々（ひやひや）と、快（い）い心持で辷（すべ）らして、懐手で、一人で桟敷へ帰って来ると、斜違（はすかい）に薄暗い便所が見えます。

そのね、手水鉢（ちょうずばち）の前に、大（おおき）な影法師見るように、脚榻（きゃたつ）に腰を掛けて、綿の厚い寝（ね）ン寝子（ねこ）で踞（うずくま）ってるのが、何だっけ、君が云った、その伝五郎。」

「ぼけましたよ、ええ、裟婆気（しゃばっけ）な駕籠屋でした。」

「まったくだね、股引（ももひき）の裾をぐい、と端折（はしょ）った処は豪勢だが、下腹がこけて、どんつくの圧（おし）に打たれて、猫

背にへたへたと滅入込(めいりこ)んで、臍(へそ)から頤(おとがい)が生えたようです。

十四五枚も、堆(うずたか)く懐に畳んで持った手拭は、汚れてはおらないが、その風だから手拭(てふ)きに出してくれるのが、鼻紙の配分をするようさね、潰(つぶ)れた古無尽(ふるむじん)の帳面の亡者にそっくり。

一度、前幕のはじめに行って、手を洗った時、そう思った。

小さな銀貨を一個(ひとつ)握(にぎ)らせると、両手で、頭の上へ押頂いて、(沢山に難有(ありがと)、難有、難有、)と懐中(ふところ)へ頤(あご)を突込(つっこ)んで礼をするのが、何となく、ものの可哀(あわれ)が身に染み

た。

その爺さんがね、見ると……その時、角兵衛という風で、頭を動かす……坐睡(いねむ)りか、と思うと悶(もが)いたんだ。仰向(あおむ)けに反(そ)って、両手の握拳(にぎりこぶし)で、肩を敲(たた)こうとするが、ひッつるばかりで手が動かぬ。

うん、と云う。

や、老人(としより)の早打肩。危いと思った時、幕あきの鳴ものが、チャンと入って、下座(げざ)の三味線(さみせん)が、ト手首を口へ取って、湿(しめり)をくれたのが、ちらりと見える。

どこか、ものの蔭から、はらはらと走って出たのはその娘で。

突然、爺様の背中へ摑まると、手水鉢の傍に、南天の実の撓々と、霜に伏さった冷い緋鹿子、真白な小腕で、どんつくの肩をたたくじゃないか。

青苔の緑青がぶくぶく禿げた、湿った貼の香のぷんとする、山の書割の立て掛けてある暗い処へ凭懸って、ああ、さすがにここも都だ、としきりに可懐く熟と視た。

そこへ、手水鉢へ来て、手を洗ったのが、若い手代

——君が云う、その美少年の猿廻。」

十二

「急いで手拭を懐中（ふところ）へ突込むと、若手代はそこいらしきりに前後（あとさき）を眴（みまわ）した、……私は書割の山の陰に潜（ひそ）んでいたろう。

誰も居ないと見定めると、直ぐに、娘をわきへ推遣（おしや）って、手代が自分で、爺様（じいさん）の肩を敲（たた）き出した。

二人はいい中で居るらしい、一目見て様子で知れる、」

「ほう、」

と唐突（だしぬけ）に声を揚げて、男衆は小溝を一つ向うへ跳んだ。初阪は小さな石橋を渡った時。

「私は旅行（たび）をした効（かい）があると思った。声は届かないけれども、趣でよく分る。……両手を働かせながら、若手代は、顔で教えて、ここは可い、自分が介抱するから、あっちへ行って芝居を見るように、と勧めるんです。娘が肯（き）かないのを、優しく叱るらしく見えると、あいあいと頷（うなず）く風でね、老年（としより）を勦（いたわ）る男の深切を、嬉しそうに、二三度見返りながら、娘はいそいそと桟敷へ帰る。その竹の扉（ひらき）を出る時、ちょっと襟を合せましたよ。

私も帰った。
間もなく、何、さしたる事でもなかったろう。すぐ

に肩癖（けんぺき）は解（ほぐ）れた、と見えて、若い人は、隣の桟敷際へ戻って来て、廊下へ支膝（つきひざ）、以前（もと）のごとし。……真中（まんなか）へ挟（はさま）った私を御覧。美しい絹糸で、身体（からだ）中かがられる、何だか擽（くすぐ）ったい気持に胸が緊（しま）って、妙に窮屈な事といったらない。

狂犬（やまいぬ）がむっくり、鼻息を吹直した。

（柿があるか、剝（む）けやい、）と涎（よだれ）で滑々（ぬらぬら）した口を切って、絹も膚（はだ）にくい込もう、長い間枕した、妾の膝で、真赤（まっか）な目を睜（みひら）くと、手代をじろり、さも軽蔑したように見て、（何（なん）しとる？　汝（わり）や！）と口汚く、まず怒鳴った。

（何じゃ、返事を待った、間抜け。勘定欲い、と取りに来た金子なら、払うてやるは知れた事や。何吐す。……三百や五百の金。うんも、すんもあるものかい、鼻かんで敲きつけろ、と番頭にそう吐かせ。）

（はい、）と、手を支く。

（さっさと去ね、こない場所へのこのこと面出しおって、何さらす、去ねやい。）

（はい、）とそれでも用ずみ。前垂の下で手を揉みながら、手代が立って、五足ばかり行きかかると、

（多一、多一、）と呼んだ。若い人は、多一と云うんだ。

（待てい、）と云う。はっと引返して、また手を支くと、

婦(おんな)の膝をはらばいに乗出して、（何じゃやな、向うから金子(かね)くれい、と使が来て店で待つじゃやな。人寄越(よこ)いたら催促やい。誰や思う、丸官、）と云ったように覚えている。……」

「ええ、丸田官蔵、船場の大金持です。」

「そうかね、（丸官は催促されて金子(かね)出いた覚えはない。へへん、）と云って、取巻の芸妓徒(げいこてあい)の顔をずらりと見渡すと、例の凄(すご)いので嘲笑(あざわら)って、軍鶏(しゃも)が蹴(け)つけるように、ポンと起きたが、（寄越せ、）で、一人剥(む)いていた柿を引手繰(ひったく)る、と仕切に肱(ひじ)を立てて、頤(あご)を、新高(しんたか)に居るどこかの島田髷(まげ)の上に突出して、丸噛(まるかじ)りに、ぼりぼりと

喰かきながら、（留めちまえ、）と舞台へ喚く。

御寮人は、ぞろりと褄を引合せる。多一は、その袖の蔭に、踞っていたんだね。

するとね、くいほじった柿の核を、ぴょいぴょいと桟敷中へ吐散らして、あはは、あはは、と面相の崩れるばかり、大口を開いて笑ったっけ。

（鉄砲打て、戦争押始めろ。大砲でも放さんかい、陰気な芝居や、馬鹿、）と云うと、また急に、険しい、苦い、尖った顔をして、じろりと多一を睨みつけた。

（何しとる、うむ、）と押潰すように云います。

（それでは、番頭さんに、その通り申聞けますでござ

います、）とまた立って、多一が歩行(ある)き出すと（こら！）
と呼んで呼び留めた。
（丁稚々々(でっちでっち)、）と今度は云うのさ。」
聞く男衆は歎息した。
「難物ですなあ。」

十三

「それからの狂犬(やまいぬ)が、条理(すじ)違いの難題といっちゃ、聞いていられなかったぜ。
（汝(わり)や、はいはいで、用を済まいた顔色(がんしょく)で、人間並に

桟敷裏を足ばかりで立って行くが、帰ったら番頭に何と言うて返事さらすんや。何や！　払うな、と俺が吩咐けたからその通り申します、と申しますが、呆れるわい、これ、払うべき金子を払わいで、主人の一分が立つと思うか。（五百円や三百円、）と大な声して、（端金子、）で、底力を入れて塗りつけるように声を密めて……（な、端金子を、ああもこうもあるものかい。俺が払うな、と言うたかて払え。さっさと一束にして突付けろ。帰れ！　大白痴、その位な事が分らんか。）

で、また追立てて、立掛ける、とまたしても、（待ちおれ。）だ。

（分ったか、何、分った、偉い！　出来す、）と云ってね、ふふん、と例の厭な笑方をして、それ、直ぐに芸妓連の顔をぎょろり。

（分ったら言うてみい、帰って何と返事をする、饒舌れ。一応は聞いておく。丸官後学のために承りたい、ふん、）と鼻を仰向けに耳を多一に突附けて、そこにありあわせた、御寮人の黄金煙管を握って、立続けに、ふかふか吹かす。

（判然言え、判然、ちゃんと口上をもって吐かせ。うん、番頭に、番頭に、何だ、金子を払え？……

……黙れ！　沙汰過ぎた青二才、）と可恐い顔になった。

（誰が？）と吠えるような声で、（誰が払えと言った。誰が、これ、五百円は大金だぞ！

丸官、たかを聞いてさえぶるぶるする。これ、この通り震えるわい。）で、胴肩を一つに揺り上げて、（大胆ものめが、土性骨の太い奴や。主人のものだとたかを括って、大金を何の糟とも思いくさらん、乞食を忘れたか。）

と言う。

目に涙を一杯ためて、（御免下さいまし、）と、退って廊下へ手を支くと、（あやまるに及ばん、よく、考えて、何と計らうべきか、そこへくい附いて分別して返

答せい。……石になるまで、汝や動くな。）とまた柿を引手繰って、かツかツと喰いかきながら、（止めちまえ、馬鹿、）と舞台へ怒鳴る。

（旦那様、旦那様、）多一が震声で呼んだと思え。

（早いな、汝がような下根な奴には、三年かかろうと思うた分別が、立処は偉い。俺を呼ぶからには工夫が着いたな。まず、褒美を遣る。そりゃ頂け、）と柿の蔕を、色白な多一の頬へたたきつけた。

（もし、御寮人様、）と熟と顔を見て、（どうしましたら宜しいのでございましょう、）と縋るようにして言ったか言わぬに、（猿曳め、汝や、婦に、……畜生、）と

喚（わめ）くが疾（はや）いか、伸掛（のしかか）って、ピシリと雁首（がんくび）で額を打（ぶ）ったよ。羅宇（らう）が真中（まんなか）から折れた。

　こちらの桟敷に居た娘が、誰より先に、ハッと仕切へ顔を伏せる、と気を打たれたか、驚いた顔をして、新高の、ちょうど下に居た一人商人風の男が、中腰に立って上を見た。

　芸妓達も一時（いっとき）に振向いて目を合せた、が、それだけさ。多一が圧（おさ）えた手の指から、たらたらと糸すじのように血の流れるのを見たばかり、どうにも手のつけようがなさそうな容子（ようす）には弱ったね。おまけに知らない振（ふり）をして、そのまま芝居を見る姉さんがあるじゃない

か。
私は、ふいと立って、部屋へ帰った。
傍(そば)に居ちゃ、もうこっちが撮出(つまみだ)されるまでも、横面(よこつら)一ツ打挫(うちひしゃ)がなくッては、新橋へ帰られまい。が、私が取組合(とっくみあ)った、となると、随分舞台から飛んで来かねない友だちが一人居るんだからね。
頭痛がする、と楽屋へ横になったッきり、あとの事は知りません。道頓堀で、別に半鐘を打たなかったから、あれなり、ぐしゃぐしゃと消えたんだろう。
その婦(おんな)だ、呆れたぐうたらだと思ったが、」
「もし、もし、」

と男衆が、初阪の袖を、ぐい、と引いた。

十四

歩行（ある）くともなく話しながらも、男の足は早かった。と見ると、二人から十四五間、真直（まっすぐ）に見渡す。――狭いが、群集（ぐんじゅ）の夥（おびただ）しい町筋を、斜めに奴（やっこ）を連れて帰る――二個（ふたつ）、前後（あとさき）にすっと並んだ薄色の洋傘（こうもり）は、大輪の芙蓉（ふよう）の太陽（ひ）を浴びて、冷たく輝くがごとくに見えた。

水打った地（つち）に、裳（もすそ）の綾（あや）の影も射（さ）す、色は四辺（あたり）を払ったのである。

「やあ、居る……」

と、思わず初阪が声を立てる、ト両側を詰めた屋ごとの店、累（かさな）り合って露店もあり。軒にも、路にも、透間（すきま）のない人立（ひとだち）したが、いずれも言合せたように、その後姿を見送っていたらしいから、一見赤毛布（あかげっと）のその風采（ふう）で、慌（あわただ）しく（居る、）と云えば、件（くだん）の婦（おんな）に吃驚（びっくり）した事は、往来（ゆきき）の人の、近間なのには残らず分った。

意気な案内者大（おおい）に弱って、

「驚いては不可（いけ）ません。天満の青物市です。……それ、真正面（まっしょうめん）に、御鳥居を御覧なさい。」

はじめて心付くと、先刻（さっき）視（なが）めた城に対して、稜威（みいず）は

高し、宮居（みやい）の屋根。雲に連なる甍（いらか）の棟は、玉を刻んだ峰である。

向って鳥居から町一筋、朝市の済んだあと、日蔽（ひおおい）の葭簀（よしず）を払った、両側の組柱は、鉄橋の木賃に似て、男も婦（おんな）も、折から市人（いちびと）の服装（なり）は皆黒いのに、一ツ鮮麗（あざやか）に行（ゆ）く美人の姿のために、さながら、市松障子の屋台した、菊の花壇のごとくに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突然（いきなり）入ったから驚いたんです。」

「そうでしょう。」

擦違（すれちが）った人は、初阪（ものの）の顔を見て皆笑（わらい）を含む。

両人（ふたり）は苦笑した。

「ほっこり、暖（あったか）い、暖い。」

蒸芋（ふかしいも）の湯気の中に、紺の鯉口（こいぐち）した女房が、ぬっくりと立って呼ぶ。

「おでんや、おでん！」

「饂飩（うどん）あがんなはらんか、饂飩。」

「煎餅（せんべい）買いなはれ、買いなはれ。」

鮨（すし）の香気（かおり）が芬（ぷん）として、あるが中に、硝子戸越（ガラスどごし）［＃「硝子戸越」は底本では「硝戸戸越」］の紅（くれない）は、住吉の浦の鯛、淡路島の蝦（えび）であろう。市場の人の紺足袋に、はらはらと散った青い菜は、皆天王寺の蕪（かぶら）と見た。……

頬被（ほおかむり）したお百姓、空籠荷（からかごにの）うて行違（ゆきちが）う。

軒より高い競売（せり）もある。

傘（からかさ）さした飴屋（あめや）の前で、奥深い白木の階（きざはし）に、二人まず、帽子を手に取った時であった。――前途（ゆくて）へ、今大鳥居を潜（くぐ）るよと見た、見る目も彩（あや）な、お珊の姿が、それまでは、よわよわと気病（きやみ）の床を小春日和（こはるびより）に、庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たよう、扱帯（しごき）で褄（つま）取らぬばかりに、日の本の東西にただ二つの市の中を、徐々（しずしず）と拾ったのが、たちまち電（いなずま）のごとく、颯（さっ）と、照々（てらてら）とある円柱（まるばしら）に影を残して、鳥居際から衝（つ）と左へ切れた。

が、目にも留まらぬばかり、掻消すがごとくに見えなくなった。

高く競売屋が居る、古いが、黒くがっしりした屋根越の其方の空、一点の雲もなく、冴えた水色の隈なき中に、浅葱や、樺や、朱や、青や、色づき初めた銀杏の梢に、風の戦ぐ、と視めたのは、皆見世ものの立幟。

太鼓に、鉦に、ひしひしと、打寄する跫音の、遠巻きめいて、遥に淀川にも響くと聞きしは、誓文払いに出盛る人数。お珊も暮るれば練るという、宝の市の夜をかけた、大阪中の賑いである。

十五

「御覧なさい、これが亀の池です。」

と云う、男衆の目は、――ここに人を渡すために架（か）けたと云うより、築山（つきやま）の景色に刻んだような、天満宮（てんまんぐう）の境内を左へ入って、池を渡る橋の上で――池は視（み）ないで、向う岸へ外（そ）れた。

階（きざはし）を昇って跪（ひざまず）いた時、言い知らぬ神霊に、引緊（ひきしま）った身の、拍手（かしわで）も堅く附着（くッつい）たのが、このところまで退出（まかんで）て、やっと掌（たなそこ）の開くを覚えながら、岸に、そのお珊の彳（たたず）んだのを見たのであった。

麩(ふ)でも投げたか、奴(やっこ)と二人で、同じ状(さま)に洋傘(こうもり)を傾けて、熟(じっ)と池の面(おも)を見入っている。

初阪は、不思議な物語に伝える類(たぐい)の、同じ百里の旅人である。天満の橋を渡る時、ふとどこともなく立顕(たちあらわ)れた、世にも凄(すご)いまで美しい婦(おんな)の手から、一通玉章(たまずさ)を秘めた文箱(ふばこ)を 託(ことずか)って来て、ここなる池で、かつて暗示された、別な美人(たおやめ)が受取りに出たような気がしてならぬ。

しかもそれは、途中互(たがい)にもの言うにさえ、声の疲れた……激しい人の波を泳いで来た、殷賑(いんしん)、心斎橋(しんさいばし)、高麗橋(こうらいばし)と相並ぶ、天満の町筋を徹(とお)してであるにもかか

わらず、説き難き一種寂寞（せきばく）の感が身に迫った。参詣群集（さんけいぐんじゅ）、隙間のない、宮、社（やしろ）の、フトした空地は、こうした水ある処に、思いかけぬ寂しさを、日中（ひなか）は分けて見る事がおりおりある。

ちょうど池の辺（ほとり）には、この時、他に人影も見えなかった。……

橋の上に小児（こども）を連れた乳母が居たが、此方（こなた）から連立って、二人が行掛（ゆきかか）った機会（しお）に、

「さあ、のの様の方へ行こか。」と云って、手を引いて、宮の方（かた）へ徐々（そろそろ）帰った。その状（さま）が、人間界へ立帰るごとくに見えた。

池は小さくて、武蔵野の埴生(はにゅう)の小屋が今あらば、その潦(にわたずみ)ばかりだけれども、深翠(ふかみどり)に萌黄(もえぎ)を累(かさ)ねた、水の古さに藻が暗く、取廻わした石垣も、草は枯れつつ苔滑(こけなめらか)。牡丹(ぼたん)を彫らぬ欄干も、巌(いわお)を削った趣(おもむき)がある。あまつさえ、水底(みなぞこ)に主(ぬし)が棲(す)む……その逸するのを封ずるために、雲に結(ゆわ)えて鉄(くろがね)の網を張り詰めたように、百千の細(こまか)な影が、漣(さざなみ)立(た)って、ふらふらと数知れず、薄黒く池の中に浮いたのは、亀の池の名に負える、水に充満(みちみち)た亀なのであった。

枯蓮(かれはす)もばらばらと、折れた茎に、トただ一つ留ったのは、硫黄(いおう)ケ島の赤蜻蛉(あかとんぼ)。

緋鯉(ひごい)の背は飜々(ひらひら)と、お珊の裳(もすそ)の影に靡(なび)く。

居たのは、つい、橋の其方(そなた)であった。

半襟は、黒に、蘆(あし)の穂が幽(かすか)に白い、紺地(こんのじ)によりがらみの細い格子、お召縮緬(めしちりめん)の一枚小袖、ついわざとらしいまで、不断着で出たらしい。コオトも着ない、羽織の色が、派手に、渋く、そして際立って、ぱっと目についた。

髪の艶(つや)も、色の白さも、そのために一際目立つ、——糸織か、一楽(いちらく)らしいくすんだ中に、晃々(きらきら)と冴(さ)えがある、きっぱりした地の藍鼠(あいねずみ)に、小豆色(あずきいろ)と茶と紺と、すらすらと色の通った縞(しま)の乱立(らんたつ)。

蒼空（あおぞら）の澄んだのに、水の色が袖に迫って、藍は青に、小豆は紅（くれない）に、茶は萌黄（もえぎ）に、紺は紫の隈（くま）を染めて、明（あかる）い中に影さすばかり。帯も長襦袢もこれに消えて、山深き処、年古（ふ）る池に、ただその、すらりと雪を束（つか）ねたのに、霧ながら木（こ）の葉に綾（あや）なす、虹（にじ）を取って、細く滑（なめら）かに美しく、肩に掛けて背に捌（さば）き、腰に流したようである。汀（みぎわ）は水を取廻わして、冷い若木の薄もみじ。

光線は白かった。

その艶（えん）なのが、女（め）の童（わらわ）を従えた風で、奴（やっこ）と彳（たたず）む。

……汀に寄って……流木（ながれぎ）めいた板が一枚、ぶくぶくと浮いて、苔塗（こけまみ）れに生簀（いけす）の蓋（ふた）のように見えるのがあった。日は水を劃（くぎ）って、その板の上ばかり、たとえば温かさを積重ねた心持にふわふわ当る。

それへ、ほかほかと甲（こうら）を干した、木（こ）の葉に交って青銭の散った状（さま）して、大小の亀は十（と）ウ二十、磧（かわら）の石の数々居た。中には軽石のごときが交って。——

いずれ一度は擒（とりこ）となって、供養にとて放された、が狭い池で、昔売買（うりかい）をされたという黒奴（くろんぼ）の男女（なんにょ）を思出させる。島、海、沢、藪（やぶ）をかけた集り勢、これほどの数

が込合ったら、月には波立ち、暗夜（やみ）には潜（ひそ）んで、ひそひそと身の上話がはじまろう。

故郷（ふるさと）なる、何を見るやら、向（むき）は違っても一つ一つ、首を据えて目を睜（みは）る。が、人も、もの言わず、活（いき）ものがこれだけ居て余りの静かさ。どれかが幽（かすか）に、えへん、と咳払（せきばらい）をしそうで寂（さみ）しい。

一頭（ひとつ）、ぬっと、ざらざらな首を伸ばして、長く反（そ）って、汀を仰いだのがあった。心は、初阪等二人と斉（ひと）しく、絹糸の虹を視（なが）めたに違いない。

「気味の悪いもんですね、よく見るといかにも頭つきが似ていますぜ。」

男衆は両手を池の上へ出しながら、橋の欄干に凭(もた)れて低声(こごえ)で云う。あえて忍音(しのびね)には及ばぬ事を。けれども、……ここで云うのは、直(じか)に話すほど、間近な人に皆聞える。

「まったく、魚(うお)じゃ鯔(ぼら)の面色(かおつき)が瓜二つだよ。」

その何に似ているかは言わずとも知れよう。

「あああ、板の下から潜出(もぐりだ)して、一つ水の中から顕(あらわ)れたのがあります。大分大きゅうがすせ。」

成程、たらたらと漆(うるし)のような腹を正的(まとも)に、甲(こうら)に濡色の薄紅(うすべに)をさしたのが、仰向(あおむ)けに鰓(あぎと)を此方(こなた)へ、むっくりとして、そして頭の尖(さき)に黄色く輪取った、その目が

凸(なかだか)にくるりと見えて、鱗(うろこ)のざらめく蒼味(あおみ)がかった手を、卜板の縁(ふち)へ突張(つっぱ)って、水から半分ぬい、と出た。

「大将、甲羅(こうら)干しに板へ出る気だ。それ乗ります。」

と男衆の云った時、爪が外れて、ストンと落ちた。

が、直ぐにすぼりと胸を浮かす。

「今度は乗るぜ。」

やがて、甲羅を、残らず藻の上へ水から離して踏張(ふんば)った。が、力足らず、乗出した勢(いきおい)が余って、取外ずすと、ずんと沈む。

「や、不可(いけな)い。」

たちまち猛然としてまた浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い体を伸上(のしあ)げる。

「しっかりしっかり、今度は大丈夫。あ、また辷(すべ)った。大事な処で。」と男衆は胸を乗出す。

汀のお珊は、褄(つま)をすらりと足をちょいと踏替えた。

奴島田(やっこしまだ)は、洋傘(こうもり)を畳んで支(つ)いて、直ぐ目の下を、前髪に手庇(てびさし)して覗込(のぞきこ)む。

この度は、場処を替えようとするらしい。

斜(ななめ)に甲羅を、板に添って、手を掛けながら、するすると泳ぐ。これが、棹(さお)で操るがごとくになって、夥多(あまた)の可(いい)心持に乾いた亀の子を、カラカラと載(の)せたままで、

水をゆらゆらと流れて辷った。が、熟(じっ)として嚔(くしゃみ)したもの一つない。

板の一方は細いのである。

そこへ、手を伸ばすと、腹へ抱込(かかえこ)めそうに見えた。

いや、困った事は、重量(おもみ)に圧(お)されて、板が引傾(ひっかたむ)いたために、だふん、と潜る。

「ほい、しまった。いや、串戯(じょうだん)じゃない。しっかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトントン叩く。

あせる、と見えて、むらむらと紋が騒ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り探り手が掛(かか)った。と思うと、

ずぼりと出る。

「蛙（かわず）だと青柳硯（あおやぎすずり）と云うんです。」

「まったくさ。」

十七

けれども、その時もし遂げなかった。

「ああ、惜（おし）い。」

男衆も共に、ただ一息と思う処で、亀の、どぶりと沈むごとに、思わず声を掛けて、手のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げてやりたい。が、もう弱ったかな。」

と言う間もなかった。

この時は、手の鱗も逆立つまで、しゃっきりと、爪を大きく開ける、と甲の揺（ゆら）ぐばかり力が入って、その手を扁平（ひらた）く板について、白く乾いた小さな亀の背に掛けた。

「ははあ、考えた。」

「あいつを力に取って伸上（のしあが）るんです、や、や、どッこい。やれ情（なさけ）ない。」

ざぶりと他愛(たわい)なく、またもや沈む。

男衆が時計を視(み)た。

「もう二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々(そろそろ)帰りましょう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないじゃ気が残るようだね。」

「え、私も気になりますがね、だって、日が暮れるまで掛(かか)るかも知れませんから。」

「妙に残惜(のこりおし)いようだよ。」

男衆は、汀(みぎわ)の婦(おんな)にちょいと目を遣って、密(そっ)と片頬笑(かたほおえみ)して声を潜(ひそ)めた。

「串戯じゃありませんぜ。ね、それ、何だか薄りと美しい五色の霧が、冷々と掛るようです。……変に凄いようですぜ。亀が昇天するのかも知れません。板に上ると、その機会に、黒雲を捲起して、震動雷電……」

「さあ、出掛けよう。」

二人は肩を寒くして、コトコトと橋の中央から取って返す。

やがて、渡果てようとした時である。

「ちょっと、ちょっと。」

と背後から、優いが張のある、朗かな、そして幅のある声して呼んだ。何等の仔細なしには済むまいと

思った半日。それそれ、言わぬ事か、それ言わぬ事か。
袖を合せて、前後（あとさき）に、ト斉（ひと）しく振返ると、洋傘（こうもり）は畳んで、それは奴（やっこ）に持たした。縺毛一条（もつれげひとすじ）もない黒髪は、取って捌（さば）いたかと思うばかり、痩（やせ）ぎすな、透通るような頬を包んで、正面（まとも）に顔を合せた、襟はさぞ、雪なす咽喉（のど）が細かった。

「手前どもで、」と男衆は如才ない会釈をする。

奴は黙って、片手をその膝のあたりへ下げた。

「そうどす。」と判然（はっきり）云って莞爾（にっこり）する、瞼（まぶた）に薄く色が染まって、類（たぐい）なき紅葉（もみじ）の中の俤（おもかげ）である。

「一遍お待ちやす……思（おもい）を遂げんと気がかりなよっ

て、見ていておくれやす。私（あて）が手伝うさかいな。」

猶予（ためら）いあえず、バチンと蓮（はす）の果（み）の飛ぶ音が響いた。お珊は帯留（おびどめ）の黄金（きん）金具、緑の照々（きらきら）と輝く玉を、烏羽玉（うばたま）の夜の帯から星を手に取るよ、と自魚の指に外ずして、見得もなく、友染（ゆうぜん）を柔（やわらか）な膝なりに、腰をなよなよと汀に低く居て——あたかも腹を空に突張（つっぱ）ってによいと上げた、藻を押分けた——亀の手に、縋（すが）れよ、引かむ、とすらりと投げた。

帯留は、銀（しろがね）の曇ったような打紐（うちひも）と見えた。

その尖（さき）は水に潜（くぐ）って、亀の子は、ばくりと紐を嚙（か）む、ト袖口を軽く袂（たもと）を絞った、小腕（こかいな）白く雪を伸べた。が、

重量（おもみ）がかかるか、引く手に幽（かすか）に脈を打つ。その二の腕、顔、襟、頸（うなじ）、膚（はだ）に白い処は云うまでもない、袖、褄（つま）の、艶（えん）に色めく姿、爪尖（つまさき）まで、――さながら、細い黒髪の毛筋をもって、線を引いて、描き取った姿絵のようであった。

十八

池の面（おも）は、蒼（あお）く、お珊の唇のあたりに影を籠（こ）めた。

風少し吹添って、城ある乾（いぬい）の天（そら）暗く、天満宮の屋の棟が淀（どんよ）り曇った。いずこともなく、はたはたと帆を

打つ響きは、幟（のぼり）の声、町には黄なる煙が走ろう、数万人の形を掠（かす）めて。……この水のある空ばかり、雲に硝子（がらす）を嵌（は）めたるごとく、美女（たおやめ）の虹（にじ）の姿は、姿見の中に映るかと、五色の絹を透通して、色を染めた木（こ）の葉は淡く、松の影が颯（さっ）と濃い。

　打紐にまた脈を打って、紫の血が通うばかり、時に、腕（かいな）の色ながら、しろじろと鱗（うろこ）が光って、その友染に搦（から）んだなりに懐中（ふところ）から一条（ひとすじ）の蛇（くちなわ）の蜿（うね）り出た、思いかけず、ものの凄（すさま）じい形になった。

「あ、」

　と云う声して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、

光を消して、亀の口に銜（くわ）えたまま、するするする、と水脚を引いてそのまま底に沈んだのである。

奴（やっこ）はじりじりと後に退（すさ）った。

お珊は汀（みぎわ）にすっくと立った。が、血が留って、俤（おもかげ）は瑪瑙（めのう）の白さを削ったのであった。

この婦（おんな）が、一念懸けて、すると云うに、誰が何を妨げ得よう。

日も待たず、その翌（あけ）の日の夕暮時、宝の市へ練出す前に、——丸官が昨夜（ゆうべ）芝居で振舞った、酒の上の暴虐（ぼうぎゃく）の負債（おいめ）を果させるため、とあって、——南新地の浪屋の奥二階。金屏風（きんびょうぶ）を引繞（ひきめぐ）らした、四海波静（しかいなみしずか）に青畳の

八畳で、お珊自分に、雌蝶雄蝶（めちょうおちょう）の長柄（ながえ）を取って、橘（たちばな）活（い）けた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云う、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据えたのである。

晴の装束は、お珊が金子（かね）に飽（あ）かして間に合わせた、宝の市の衣裳であった。

まず上席のお美津を謂（い）おう。髪は結いたての水の垂るるような、十六七が潰（つぶ）し島田。前髪をふっくり取って、両端へはらりと分けた、遠山の眉にかかる柳の糸の振分は、大阪に呼んで（いたずら）とか。緋縮緬（ひぢりめん）のかけおろし。橘に実を抱かせた笄（こうがい）を両方に、雲井の

薫（かおり）をたきしめた、烏帽子（えぼし）、狩衣（かりぎぬ）。朱総（しゅぶさ）の紐は、お珊が手にこそ引結うたれ。着つけは桃に薄霞（うすがすみ）、朱鷺色絹（ときいろぎぬ）に白い裏、膚（はだえ）の雪の紅（くれない）の襲（かさね）に透くよう媚（なまめ）かしく、白の紗（しゃ）の、その狩衣を装い澄まして、黒繻子（くろじゅす）の帯、箱文庫。

含羞（はなじろ）む瞼（まぶた）を染めて、玉の項（うなじ）を差俯向（さしうつむ）く、ト見ると、雛鶴（ひなづる）一羽、松の羽衣搔取（かいと）って、曙（あけぼの）の雲の上なる、宴（うたげ）に召さるる風情がある。

同じ烏帽子、紫の紐を深く、袖を並べて面伏（おもぶせ）そうな、多一は浅葱紗（あさぎしゃ）の素袍（すおう）着て、白衣（びゃくえ）の袖を粛（つつ）ましやかに、膝に両手を差置いた。

前なるお美津は、小鼓に八雲琴（やくもごと）、六人ずつが両側に、ハオ、イヤ、と拍子を取って、金蒔絵（きんまきえ）に銀鋲（ぎんびょう）打った欄干づき、輻（やぼね）も漆の車屋台に、前囃子（まえばやし）とて楽を奏する、その十二人と同じ風俗。

後囃子（あとばやし）が、また幕打った高い屋台に、これは男の稚児（ちご）ばかり、すり鉦（がね）に太鼓を合わせて、同じく揃う十二人と、多一は同じ装束である。

二人を前に、銚子（ちょうし）を控えて、人交ぜもしなかった……その時お珊の装（よそおい）は、また立勝（たちまさ）って目覚しや。

十九

宝の市の屋台に付いて、市女(いちめ)また姫とも称(とな)うる十二人の美女が練る。……

練衣小袿(ねりぎぬこうちぎ)の紅(くれない)の袴(はかま)、とばかりでは言足らぬ。ただその上下(うえした)を装束(そうぞ)くにも、支度の夜は丑満(うしみつ)頃より、女紅場(じょこうば)に顔を揃えて一人々々沐浴(ゆあみ)をするが、雪の膚(はだえ)も、白脛(しろはぎ)も、その湯は一人ずつ紅(べに)を流し、白粉(おしろい)を汲替(くみか)える。髪を洗い、櫛(くし)を入れ、丈より長く解捌(ときさば)いて、緑の雫(しずく)すらすらと、香枕(こうまくら)の香に霞むを待てば、鶏の声しばしば聞えて、元結(もとゆい)に染む霜の鐘の音。血る潔く清き身に、唐衣(からごろも)を着け、袴を穿(は)くと、しらしらと早や旭(あさひ)の影が、

霧を破って色を映す。
　さて住吉の朝ぼらけ、白妙（しろたえ）の松の樹（こ）の間を、静々と詣（もう）で進む、路の裳（もすそ）を、皐月御殿（さつきごてん）、市（いち）の式殿にはじめて解いて、市の姫は十二人。袴を十二長く引く。……
　その市の姫十二人、御殿の正面に揖（ゆう）して出（い）づれば、神官、威儀正しく彼処（かしこ）にあり。土器（かわらけ）の神酒（みき）、結び昆布。やがて檜扇（ひおうぎ）を授けらる。これを受けて、席に帰って、緋や、萌黄（もえぎ）や、金銀の縫箔（ぬいはく）光を放って、板戸も松の絵の影に、雲白く梢（こずえ）を繞（めぐ）る松林（しょうりん）に日の射（さ）す中に、一列に並居（なみい）る時、巫子（みこ）するすると立出（たちい）でて、美女の面（おもて）一（いち）人ごとに、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛（まゆずみ）を描

く、と聞く。

素顔の雪に化粧して、皓歯（しらは）に紅を濃く含み、神々しく気高いまで、お珊はここに、黛さえほんのりと描いている。が、女紅場の沐浴（もくよく）に、美しき膚（はだ）を衆に抽（ぬ）き、解き揃えた黒髪は、夥間（なかま）の丈を圧（おさ）えたけれども、一人渠（かれ）は、住吉の式に連（つらな）る事をしなかった。

間際に人が欠けては事が済まぬ。

世話人一同、袴腰を捻返（ねじかえ）して狼狽（うろた）えたが、お珊が思うままな金子（かね）の力で、身代りの婦（おんな）が急に立った。で、これのみ巫女（みこ）の手を借りぬ、容色（きりょう）も南地（なんち）第一人。袴の色の緋よりも冴えた、笹紅（ささべに）の口許（くちもと）に美しく微笑（ほほえ）ん

だ。

「多一さん、美津（みい）さん、ちょっと、どないな気がおしやす。」

唐織衣（からおりごろも）に思いもよらぬ、生地（きじ）の芸妓（げいこ）で、心易げに、島台を前に、声を掛ける。

素袍の紗（しゃ）に透通る、燈（ともし）の影に浅葱（あさぎ）とて、月夜に色の白いよう、多一は照らされた面色（おももち）だった。

「なあ？」とお珊が聞返す、胸を薄く数を襲（かさ）ねた、雪の深い襲ねの襟に、檜扇を取って挿していた。

「御寮人様。」

と手を下げて、

「何も、何も、私は申されませぬ。あの、ただ夢のようにござります。」とやっと云って、烏帽子を正しく、はじめて上げた、女のような優しい眉の、右を残して斜めに巻いたは、笞の疵に、無慚な繃帯。

お珊は黒目がちに、熟と瞶って、

「ほんに、そう云うたら夢やな。」

と清らかな襖のあたり、座敷を衝と眴した。

ト柱、襖、その金屏風に、人の影が残らず映った。映って、そして、緋に、紫に、朱鷺色に、二人の烏帽子、素袍、狩衣、彩あるままに色の影。ことにお珊の黒髪が、一条長く、横雲掛けて見えたのである。

二十

時に、間(ま)を隔てた、同じ浪屋の表二階に並んだ座敷は、残らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃えた、両側の揚屋と斉(ひと)しく、毛氈(もうせん)を聯(つら)ねた中に、やがて時刻に、ここを出て、一まず女紅場で列を整え、先立ちの露払い、十人の稚児(ちご)が通り、前囃子(まえばやし)の屋台を挟(さしはさ)んで、そこに、十二人の姫が続く。第五番に、檜扇(ひおうぎ)取って練る約束の、我(おの)がお珊の、市随一の曠(はれ)の姿を見ようため、芸妓(げいこ)、幇間(たいこもち)をずらりと並べて、宵から

ここに座を構えた。

が、その座敷もまだ寂寞(ひっそり)して、時々、階子段(はしごだん)、廊下などに、遠い跫音(あしおと)、近く床しき衣摺(きぬずれ)の音のみ聞ゆる。

お珊は袖を開き、居直って、

「まあな、ほんに夢のようにあろな。私かて、夢かと思う。」

と、﨟丈(ろうた)けた黛(まゆずみ)、恍惚(うっとり)と、多一の顔を瞻(みまも)りながら、

「けど、何の、何の夢やおへん。たとい夢やかて。……丸官はんの方もな、私が身に替えて、承知させた……三々九度(さかずき)やさかい、ああした我(わが)ままな、好勝手な、朝云うた事は晩に変えやはる人やけど、これはかりは、

私が附いているよって、承合(うけお)うて、どないしたかて夢にはせぬ。……あんじょう思うておくんなはれや。美津(みい)さん、」

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほほ、」

手を口許に翳(かざ)したが、

「こう云うたかて、多一さんと貴女(あんた)とは、前世から約束したほど、深い交情(なか)でおいでる様子。今更ではあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。

思うてみれば、一昨日(おととい)の夜(よ)さり、中の芝居で見たまでは天王寺の常楽会(じょうらくえ)にも、天神様の御縁日にも、つい

ぞ出会うた事もなかったな。

一見(いちげん)でこうなった。

貴女(あんた)な、ようこそ、芝居の裏で、お爺(じい)はんの肩摺(さす)って上げなはった。多一さんも人目忍んで、貴女の孝行手伝わはった。……自分介抱するよって、一条(ひとくさり)なと、可愛い可愛い女房(おかみ)はんに、沢山(たんと)芝居を見せたい心や。またな、その心を汲取(くみと)って、鶉(うずら)へ嬉々(いそいそ)お帰りやした、貴女の優しい、仇気(あどけ)ない、可愛らしさも身に染みて。

……

私はな、丸官はんに、軋々(ぎしぎし)と……四角な天窓(あたま)乗せられて、鶉の仕切も拷問(ごうもん)の柱とやら、膝も骨も砕けるほ

ど、辛い苦しい堪え難い、石を抱く責苦に逢うような中でも、身節（みふし）も弛（ゆる）んで、恍惚（うっとり）するまで視（なが）めていた。あの…………扉（ひらき）の、お仕置場らしい青竹の矢来（やらい）の向うに……貴女等（あんたたち）の光景（ようす）をば。——

悪事は虎の千里走る、好（い）い事は、花の香ほども外へは漏れぬ言うけれど、貴女（あんた）二人は孝行の徳、恋の功（てがら）、恩愛の報（むくい）だすせ。誰も知るまい、私一人、よう知った。

逢阪に店がある、餅屋の評判のお娘（こ）さん、御両親（おふたおや）は、どちらも行方（ゆきがた）知れずなった、その借銭やら何やらで、苦労しなはる、あのお爺さんの孫や事まで、人に聞いて知ったよって、ふとな、彼やこれや談合しよう気に

なったも、私ばかりの心やない。

天満の天神様へ行た、その帰途（かえり）に、つい虚気々々（うかうか）と、もう黄昏（たそがれ）やいう時を、寄ってみたい気になって、貴女の餅屋へ土産買う振りで入ったら、」

と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間（ま）をちょっと逢いに寄って、町並灯（あかり）の点（とも）された中に、その店だけは灯（ひ）もつけぬ、暗いに島田が黒かったえ。そのな、綳帯が白う見えた。」

二十一

　小指を外《そ》らして指の輪を、我目の前《さき》へ、……お珊はそれが縁を結ぶ禁厭《まじない》であるようにした。
「密々《ひそひそ》、話していやはったな。……そこへ、私が行合《ゆきあ》[#ルビの「ゆきあ」は底本では「ゆきわ」]わせたも、この杯の瑞祥《ずいしょう》だすぜ。
　ここで夫婦にならはったら、直ぐにな、別に店を出してもらうなり、世帯《しょたい》持ってそこから本店《ほんだな》へ通うなり、あの、お爺はんと、三人、あんじょ暮らして行《ゆ》かはるように、私がちゃと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんに否《いや》は言わせぬ。よって、安心おしやすや。え、嬉しいやろ。美津《みい》さんが、あの、嬉しそうなえ。

どうや、九太夫（くだゆう）はん。」
と云った、お珊は、密（そっ）と声を立てて、打解けた笑顔になった。
多一は素袍の浅葱（あさぎ）を濃く、袖を緊（し）めて、またその顔を、はッと伏せる。
「ほほほほ多一さん、貴下（あんた）、そうむつかしゅうせずと、胡坐（じょうら）組む気で、杯しなはれ。私かて、丸官はんの傍（そば）に居るのやない、この一月は籍のある、富田屋（とんだや）の以前の芸妓（げいこ）、そのつもりで酌をするのえ。
仮祝言や、儀式も作法も預かるよってな。後（のち）にまたあらためて、歴然（れっき）とした媒妁人（なこうど）立てる。その媒妁人

やったら、この席でこないな串戯（わやく）は言えやへん。

そない極（きま）らずといておくれやす。なあ、九太夫はん。」

「御寮人様。」

と片手を畳へ、

「私はもう何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬようにござります。が、その九太夫は情（なさけ）のうござります。」

と、術なき中にも、ものの嬉しそうな笑（えみ）を含んだ。

「そうやかて、貴方（あんた）、一昨日（おととい）の暮方、餅屋の土間に、……そないして、話していなはった処へ、私が、ト行

た……姿を見ると、腰掛框の縁の下へ、慌てもうて、潜って隠れやはったやないかいな。」

言う――それは事実であった。――

「はい、唯今でこそ申します、御寮人様がまたお意地の悪い。その框へ腰をお掛けなされまして、盆にあんころ餅寄越せ、茶を持てと、この美津に御意ござります。

その上、入る穴はなし、貴女様の召しものの薫が、魔薬とやらを嗅ぎますようで、気が遠くなりました。

その辛さより、犬になってのこのこと、下屋を這出しました時が、なお術のうござりましてござります。」

「ほほほ可厭(いや)な、この人は。……最初はな、内証で情婦(いろ)に逢やはるより何の余所(よそ)の人でないものを、私の姿を見て隠れやはった心の裡(うち)が、水臭いようにあって、口惜(くやし)いと思うたけれど、な、……手を支(つ)いて詫言(わびい)やはる……その時に、門(かど)のとまりに、ちょんと乗って、むぐむぐ柿を頬張っていた、あの、大(おおき)な猿が、土間へ跳下(とびお)りて、貴下(あんた)と一所に、頭を土へ附けたのには、つい、おろおろと涙が出たえ。

柿は、貴下の土産やったそうに聞くな。

天王寺の境内で、以前舞わしてやった、あの猿。どないなった問うた時、ちと知縁のものがあって、その

方へ、とばかり言うて、預けた先方（さき）を話しなはらん、住吉辺の田舎へなと思うたら、大切（だいじ）な許（とこ）に居るやもの。

おお、それなりで、貴方（あんた）たちを、私が方へ、無理に連れもうて来てしもうたが、うっかりしたな、お爺はんは、今夜は私の市女笠持って附いてもらうよって、それも留守。あの、猿はどうしたやろな。」

「はい、」

と娘が引取った、我が身の姿と、この場の光景（ようす）、踊のさらいに台辞（せりふ）を云うよう、細く透（とお）る、が声震えて、

「お爺さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に居て、ようなな、いつも留守してくれますのえ。」

二十二

「飼主とは申しましても、かえって私の方が養われました、あの、猿でさえ、……」

多一は片手に胸を圧(おさ)えて、

「御寮人様は申すまでもござりません、大道からお拾い下さりました。……また旦那様の目を盗みまして、私は実に、畜生にも劣りました、……」

「何や……怪我(けが)に貴方(あんた)は何やかて、美津(みい)さんは天人や、その人の夫やもの。まぁ、二人して装束をお見やす、

雛（ひな）を並べたようやないか。

けどな、多一さん、貴下（あんた）な、九太夫やったり、そのな、額の疵（きず）で、床下から出やはった処は仁木（にっき）どすせ。沢山（たんと）忠義な家来ではどちらやかてなさそうな。」

と軽口に、奥もなく云うて退（の）けたが、ほんのりと潤（うる）みのある、瞼（まぶた）に淡く影が映（さ）した。

「ああ、わやく云う事やない。……貴方（あんた）、その疵、ほんとにもう疼痛（いたみ）はないか。こないした嬉しさに、ずきずきしたかて忘らりょう。けど、疵は刻んで消えまいな。私が傍（そば）に居たものを。美津（みい）さんの大事な男に、怪我させて済まなんだな。

そやけど、美津さん、怨（うら）みにばかり、思いやすな。何百人か人目の前で、打擲（ちょうちゃく）されて、熟（じっ）と堪（こら）えていやはったも、辛抱しとげて、貴女（あんた）と一所に、添遂げたいばかりなんえ。そしたら、男の心中（しんじゅう）の極印（ごくいん）打ったも同じ事、喜んだかて可（い）いのどす。」

お美津は堪（こら）えず、目に袖を当てようとした。が、朱鷺色（ときいろ）衣に裏白きは、神の前なる薄紅梅、涙に濡らすは勿体ない。緋縮緬を手に搦（から）む、襦袢は席の乱れとて、強いて堪えた頬の靨（えくぼ）に、前髪の艶しとしとと。

お珊は眦（まなじり）を多一に返して、

「な、多一さんもそうだすやろな。」

「はい！」と聞返すようにする。
「丸官はんに、柿の核(たね)吹かけられたり、口車に綱つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇(らう)のポッキリ折れたまで、そないに打擲されやして、死身(しにみ)になって堪えなはったも、誰にした辛抱でもない、皆、美津さんのためやろな。」
「…………」
「なあ、貴方、」
「…………」
「ええ、多一さん、新枕(にいまくら)の初言葉(ういことば)と、私もここでちゃんと聞く。……女子(おなご)は女子同士やよって、美津さんの

味方して、私が聞きたい。貴方はそうはなかろうけど、男は浮気な……」
と見る、月がぱっちりと輝いた。多一は俯向(うつむ)いて見なかった。
「……ものやさかい、美津さんの後の手券(てがた)に、貴方の心を取っておく。ああまで堪えやした辛抱は、皆女子へ、」
「ええ、」
「あの、美津さんへの心中だてかえ。」
多一はハッと畳に手を……その素袍、指貫(さしぬき)に、刀なき腰は寂しいものであった。

「御寮人様、御推量を願いとうござります。誓文それに相違ござりません。」

お美津の両手も、鶴の白羽の狩衣に、玉を揃えて、前髪摺れに支（つ）いていた、簪（かんざし）の橘（たちばな）薫りもする。

「おお……嬉し……」

と胸を張って、思わず、つい云う。声の綾（あや）に、我を忘れて、道成寺の一条（ひとくだり）の真紅の糸が、鮮麗（あざやか）に織込まれた。

それは禁制の錦（にしき）であった。

ふと心付いた状（さま）して、動悸（どうき）を鎮めるげに、襟なる檜扇（ひおうぎ）の端をしっかと圧（おさ）えて、ト後（うしろ）を見て、襖（ふすま）にすら

り靡いた、その下げ髪の丈を視めた。
お珊の姿は陰々とした。

二十三

夫婦が二人、その若い顔を上げた時、お珊は何気なき面色した。
「ほんになあ、くどいようなが多一さん、よう辛抱しやはった。中の芝居で、あの事がなかったら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんにこの祝言を承知さす事はようせんもの。……そりゃな、夫婦にはならはった

かて、立行くように世帯が出来んとならんやないか。

通い勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんに、応、言わせたも、皆、貴方(あんた)が、美津(みい)さんのために堪(こら)えなはった、心中立(しんじゅうだて)一つやな。十年七年の奉公を一度に済ましなはったも同じ事。

額の疵(きず)は、その烏帽子に、金剛石(ダイヤモンド)を飾ったような光が映(さ)す……おお、天晴(あっぱれ)なお婿はん。

さあ、お嫁はん、お酌しょうな。」

と軽く云ったが、艶麗(あでやか)に、しかも威儀ある座を正して、

「お盞(さかずき)。」

で、長柄の銚子(ちょうし)に手を添えた。

朱塗の蒔絵(まきえ)の三組(みつぐみ)は、浪に夕日の影を重ねて、蓬萊(ほうらい)の島の松の葉越に、いかにせし、鶴は狩衣の袖をすくめて、その盞を取ろうとせぬ。

「さ、お受けや。」

と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、騒立(さわぎた)つらしい胸の響きに、烏帽子の総(ふさ)の揺るるのみ。美津は遣瀬(やるせ)なげに手を控える。

ト熟(じっ)と視(み)て、

「おお、まだ年の行(ゆ)かぬ、嬰児(ねね)はんや。多一はんと、酒事(ささごと)しやはった覚えがないな。貴女(あんた)盞を先へ取るのを

遠慮やないか。三々九度は、嫁はんが初手に受けるが法やけれど、別に儀式だった祝言やないよって、どうなと構わん。

　そやったら多一さん、貴方（あんた）先へお受けやす。」

「はい、」と斉（ひと）しく逡巡（しりごみ）する。

「どうしやはったえ。」

「御寮人様、一生に一度の事でござります。とてもの事に、ものが逆になりませんよう、やっぱり美津から……」

　とちょっと目を合せた。

「女から、お盞を頂かして下さりまし。」

「そやかて、含羞（はにかん）でいて取んなはらん。……何や、貴方（あんた）がた、おかしなえ。」

ふと気色ばんだお珊の状（さま）に、座が寂（しん）として白けた時、表座敷に、テンテン、と二ツ三ツ、音（ね）じめの音が響いたのである。

二人は黙って差俯向（さしうつむ）く。……

お珊は、するりと膝を寄せた。屹（きっ）として、

「早うおしや！　邪魔が入るとならんよって、私も直（じ）きに女紅場へ行かんとならんえ。……な、あの、酌人が不足なかい。」

二人は、せわしげに瞳を合して、しきりに目でもの

を云っていた。

「もし、」

と多一が急(せ)いた声で、

「御寮人様、この上になお罰が当ります。不足やなんの、さような事がありまして可(い)いものでござりますか。御免下さりまし、申しましょう。貴女様、その召しました、両方のお袂(たもと)の中が動きます。……美津は、あの、それが可恐(こわ)いのでござります。」と判然(はっきり)云った。

と、頤(おとがい)を檜扇(ひおうぎ)に、白小袖の底を透(すか)して、

「これか、」

と投げたように言いながら、衝(つ)と、両手を中へ、袂

を探って、肩をふらりと、なよなよとその唐織の袖を垂れたが、品(ひん)を崩して、お手玉持つよ、と若々しい、仇気(あどけ)ない風があった。

「何や、この二条(ふたすじ)の蛇が可恐い云うて？……両方とも、言合わせたように、貴方(あんた)二人が、自分たちで、心願掛けたものどっせ。

　餅屋の店で逢うた時、多一さん、貴方(あんた)はこの袋一つ持っていた。な、買うて来るついではあって、一夜祈(ひとよさいのり)はあげたけれど、用の間が忙しゅうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行(ゆ)く隙(ひま)がない、頼まれて欲(ほし)い――云うて、美津さんに託(ことづ)きよう、とそれが用で顔見に行(ゆ)かはっ

た云うたやないか。」

二十四

「美津さんもまた、日が暮れたら、高津へ行て放す心やった云うて、自分でも一筋。同じ袋に入ったのが、二ツ、ちょんと、あの、猿の留木（とまりぎ）の下に揃えてあって、――その時、私に打明けて二人して言やはったは、つい一昨日（おととい）の晩方や。

　それもこれも、貴方（あんた）がた、芝居の事があってから、あんな奉公早う罷（や）めて、すぐにも夫婦になれるように

と、身体(からだ)は両方別れていて、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈(いのり)を掛けやはる。……

蛇も二筋落合うた。

案の定、その場から、思いが叶(かの)うた、お二人さん。

あすこのな、蛇屋に蛇は多けれど、貴方がたのこの二条(ふたすじ)ほど、験(げん)のあったは外にはないやろ。私かて、親はなし、稚(ちいさ)い時から勤(つとめ)をした、辛い事、悲しい事、口惜(くや)しい事、恋しい事、」

と懐手のまま、目を睜(みは)って、

「死にたいほどの事もある。……何々の思(おもい)が遂げたいよって、貴方(あんた)二人に類似(あやか)りたさに、同じ蛇を預った。

今少し、身に附けていたいよって、こうしておいておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けどな、思い詰めては、自分の手でも持ったもの。一度、願が叶うた上では、人の袂にあるのさえ、美津さん、婦は、蛇は、可厭らしな！

よう貴女、これを持つまで、多一さんを思やはった、婦同士や、察せいでか。――袂にあったら、粗相して落すとならん。憂慮なやろさかい、私がこうするよって、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、内懐の乳のあたり、浪

打つように膨らみたり。

「婦（おんな）の急所で圧（おさ）えておく。……乳銜（くわ）えられて、私が死のうと、盞の影も覗（のぞ）かせぬ。さ、美津さん、まず、お前に。」

お珊は長柄をちょうと取る。

美津は盞を震えて受けた。

手の震えで滴々（たらたら）と露（たま）散るごとき酒の雫（しずく）、蛇（くちなわ）の色ならずや、酌参るお珊の手を掛けて燈（ともしび）の影ながら、青白き艶（つや）が映ったのである。

はたはたとお珊が手を拍（たた）くと、かねて心得さしてあったろう。廊下の障子の開く音して、すらすらと

足袋摺に、一間を過ぎて、また静にこの襖を開けて、

「お召し、」

とそこへ手を支いた、裾模様の振袖は、島田の丈長、舞妓にあらず、家から斉眉いて来ている奴であった。

「可いかい。」

「はい。」と言いさま、はらはらと小走りに、もとの廊下へ一度出て、その中庭を角にした、向うの襖をすらりと開けると、閨紅に、翠の夜具。枕頭にまた一人、同じ姿の奴が居る。

お珊が黙って、此方から差覗いて立ったのは、竜田姫の彳んで、霜葉の錦の谿深く、夕映えたるを望

める光景（ありさま）。居たのが立って、入ったのと、奴二人の、同じ八尺対扮装（ついでたち）。紫の袖、白襟が、紫の袖、白襟が。袖口燃ゆる緋縮緬（ひぢりめん）、ひらりと折目に手を掛けて、きりきりと左右へ廻して、枕を蔽（おお）う六枚屏風（びょうぶ）、表に描（か）いたも、錦葉（にしきば）なるべし、裏に白銀（しろがね）の水が走る。

「あちらへ。」

お珊が二人を導いた時、とかくして座を立った、美津が狩衣の袴の裾は、膝を露顕（あらわ）な素足なるに、恐ろしい深山路（みやまじ）の霜を踏んで、あやしき神の犠牲（にえ）に行（ゆ）く……なぜか畳は辿々（たどたど）しく、ものあわれに見えたのである。奴二人は姿を隠した。

二十五

屏風を隔てて、この紅(くれない)の袴した媒人(なこうど)は、花やかに笑ったのである。

一人を褥(しとね)の上に据えて、お珊がやがて、一人を、そのあとから閨(ねや)へ送ると、前のが、屏風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪(さげがみ)であとを追って、手を取って、枕頭(まくらもと)から送込むと、そこに据えたのが、すっと立って、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに続いて、縋(すが)って抱くばかりにし

て、送込むと、おさえておいたのが、はらはら出る。

素袍(すおう)、狩衣、唐衣、綾(あや)と錦の影を交えて、風ある状(さま)に、裾袂、追いつ追われつ、ひらひらと立舞う風情に閨を繞(めぐ)った。巫山(ふざん)の雲に桟(かけはし)懸(かか)れば、名もなき恋の淵(ふち)あらむ。左、橘(たちばな)、右、桜、衣(きぬ)の模様の色香を浮かして、水は巴(ともえ)に渦を巻く。

「おほほほほ、」

呼吸(いき)も絶ゆげな、なえたような美津の背(せな)を、屏風の外で抱えた時、お珊は、その花やかな笑(わらい)を聞かしたのである。

好き機会(しお)とや思いけん。

廊下に跫音、ばたばたと早く刻んで、羽織袴の、宝の市の世話人一人、真先に、すっすっすっと来る、当浪屋の女房さん、仲居まじりに、奴が続いて、迎いの人数。

口々に、

「御寮人様。」

「お珊様。」

「女紅場では、屋台の組も乗込みました。」

「貴女ばかりを待兼ねてござります。」

襖の中から、

「車は？」

と静に云う。

「綱も申し着けました、」と世話人が答えたのである。

「待たせはせぬえ、大事な処へ、何や！」

と声が凛とした。

黙って、すたすた、一同は廊下を引く。

とばかりあって、襖をあけた時、今度は美津が閨に隠れて、枕も、袖も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠の、白玉椿の葉の艶より、ぼんやりとした素袍で立った。

襖がくれの半身で、廊下の後前を熟と視て、人の影もなかった途端に、振返ると、引寄せた。お珊の腕が

頸（うなじ）にかかると、倒れるように、ハタと膝を支（つ）いた、多一の唇に、俯向（うつむ）きざまに、衝（つ）と。――

丸官の座敷を、表に視（なが）めて、左右に開いたに立寄りもせず、階子段（はしごだん）を颯（さっ）と下りる、とたちまち門（かど）へ姿が出た。

軒を離れて、俥（くるま）に乗る時、欄干に立った、丸官、と顔を上下（うえした）に合すや否や、矢を射るような二人曳（ににんびき）。あれよ、あれよと云うばかり、廓（くるわ）の灯（ともし）に影を散らした、群集（ぐんじゅ）はぱっと道を分けた。

宝の市の見物は、これよりして早や宗右衛門町の両側に、人垣を築いて見送ったのである。

その年十月十九日、宝の市の最後の夜（よ）は、稚児（ちご）、市女（いちめ）、順々に、後圧（あとおさ）えの消防夫（しごとし）が、篝火（かがりび）赤き女紅場の庭を離れる時から、屋台の囃子、姫たちなど、傍目（わきめ）も触（ふ）らぬ婦（おんな）たちは、さもないが、真先（まっさき）に神輿（みこし）を荷（にの）うた白丁（はくちょう）はじめ、立傘（たてがさ）、市女笠（いちめがさ）持ちの人足など、頻（しき）りに気にしては空を視（なが）めた。

通り筋の、屋根に、廂（ひさし）に、しばしば鴉（からす）が鳴いたのである。

次第に数が増すと、まざまざと、薄月（うすづき）の曇った空に、嘴（くちばし）も翼も見えて、やがては、練（ねり）ものの上を飛交わす。

列が道頓堀に小休みをした時は、立並ぶ芝居の中の

見物さえ、頻りに鴉鳴を聞いた、と後で云う。……

二十六

「宗八、宗八。」

浪屋の表座敷、床の間の正面に、丸田官蔵、この成金、何の好みか、例なる詰襟の紺の洋服、高胡坐、座にある幇間を大音に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、後押で駈着けて、今帰った処じゃやな。」

「御意にござります、へい。」

「何か、直ぐに連れてここへ来る手筈（てはず）じゃった、猿は、留木（とまりぎ）から落ちて縁の下へ半分身体（からだ）を突込（つっこ）んで、斃死（くたばっ）ていたげに云う……嘘でないな。」

「実説正銘にござりまして、へい。餅屋店（みせ）では、爺（じじい）の伝五めに、今夜、貴方様（あなたさま）、お珊の方様、」

と額を敲（たた）いて、

「すなわち、御寮人様、市へお練出しのお供を、お好（このみ）とあって承ります。……さてまた、名代娘のお美津さんは、御夫婦これに——ええ、すなわち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巣（あきす）にござります。

処へ宗八、丸官閣下お使者といたし、車を一散に乗着けまして、隣家の豆屋の女房立会い、戸を押開いて見ましたれば、いや、はや、何とも悪食（あくじき）がないたいた様子、お望みの猿は血を吐いて斃（お）ち果てておりましたに毛頭相違ござりません。」

「うむ。」

と苦切（にがりき）って頷（うなず）きながら、

「多一、あれを聞いたかい、その通りや。」と、ぐっと見下ろす。

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏（ひれふ）していたのである。

これより先、余り御無体、お待ちや、などと、慌(あわただ)しい婦(おんな)まじりの声の中に、丸官の形、猛然と躍上(おどりあが)って、廊下を鳴らして魔のごとく、二人の閨(ねや)へ押寄せた。襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき明星のごとき別天地に、こは思いも掛けず、二人の姿は、綾の帳(とばり)にも蔽(おお)われず、指貫(さしぬき)やなど、烏帽子の紐(ひも)も解かないで、屏風(びょうぶ)の外に、美津は多一の膝に俯(ふ)し、多一は美津の背(せな)に額を附けて、五人囃子の雛(ひな)二個(ふたつ)、袖を合せたようであった。

揃って、胸先がキヤキヤと痛むと云う。

「酒啖(くら)え、意気地なし！」

で、有無を言わせず、表二階へ引出された。欄干の緋（ひ）の毛氈（もうせん）は似たりしが、今夜は額を破るのでない。

「練ものを待つ内、退屈じゃ。多一やい、皆への馳走（ちそう）に猿を舞わいて見せてくれ。恥辱（はじ）ではない。汝（わり）や、丁稚（でっち）から飛上って、今夜から、大阪の旦那の一人（にん）。旧（むかし）を忘れぬためという……取立てた主人の訓戒（いましめ）と思え。

呼べ、と言えば、婦（おんな）どもが愚図（ぐず）々々吐（ぬか）す。新枕（にいまくら）は長鳴鶏（ながなきどり）の夜（よ）があけるまでは待かねる。

主従は三世の中じゃ、遠慮なしに閨へ推参に及んだ、悪く思うまいな。汝（わり）や、天王寺境内に太鼓たたいてい

て、ちょこんと猿負背（おんぶ）で、小屋へ帰りがけに、太夫どのに餅買うて、汝（われ）も食いおった、行帰りから、その娘は馴染（なじみ）じゃげな。足洗うて、丁稚になるとて、右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ケ餅と云うこと、ここに居る婦（おんな）どもが知った中。

田畝（たんぼ）の鼠が、蝙蝠（こうもり）になった、その素袍（すおう）ひらつかいたかて、今更隠すには当らぬやて。

かえって卑怯（ひきょう）じゃや。

遣（や）ってくれい。

が、聞く通り、ちゃと早手廻しに使者を立てた、宗八が帰っての口上、あの通り。

残念な、猿太夫は斃(お)ちたとあるわい。唄なと歌え、形なと見せおれ。何吐(ぬか)す、」

と、とりなしを云った二三人の年増の芸妓(げいこ)を睨廻(ねめまわ)いて、

「やい、多一！」

二十七

「致します、致します。」

と呼吸(いき)を切って、

「皆さん御免なさりまし。」

多一はすっと衣紋（えもん）を扱（しご）いた。

浅葱（あさぎ）の素袍、侍烏帽子が、丸官と向う正面。芸妓、舞妓は左右に開く。

その時、膝に手を支（つ）いて、

「……ま猿めでとうのう仕（つかまつ）る、踊るが手許（てもと）立廻り、肩に小腰をゆすり合せ、静やかに舞うたりけり……」

声を張った、扇拍子、畳を軽く拍（う）ちながら、「筑紫下りの西国船、艫（とも）に八挺（ちょう）、舳（へ）に八挺、十六挺の櫓櫂（ろかい）を立てて……」

「やんややんや。ああ惜（おし）い、太夫が居（お）らぬ。千代鶴や

い、猿になれ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴（こいつ）。ええ！　婆（ばば）どもでまけてやろう、古猿（こけざる）になれ、此奴等（こいつら）……立たぬな、おのれ。」

と立身上（たちみあが）りに、盞（さかずき）を取って投げると、杯洗（はいせん）の縁（ふち）にカチリと砕けて、颯（さっ）と欠（かけ）らが四辺（あたり）に散った。

色めき白ける燈（ともしび）に、一重瞼（ひとえまぶち）の目を清（すず）しく、美津は伏せたる面（おもて）を上げた。

「ああ、皆さん、私が猿を舞いまっせ［＃「舞いまっせ」は底本では「舞いまっせ」］。旦那さん、男のためどす。畜生になってな、私が天王寺の銀杏（いちょう）の下で、トントン踊って、養うよってな。世帯せいでも大事ない、もう

貴下（あんた）、多一さんを虐（いじ）めんとおくれやす。

ちゃと隙（ひま）もろうて去（い）ぬよって、多一さん、さあ、唄いいな、続いて、」

と、襟の扇子を衝（つ）と抜いて、すらすらと座へ立った。江戸は紫、京は紅（べに）、雪の狩衣被（か）けながら、下萌（したも）ゆる血の、うら若草、萌黄（もえぎ）は難波（なにわ）の色である。

丸官は掌（こぶし）を握った。

多一の声は凛々（りんりん）として、

「しもにんにんの宝の中に——火取る玉、水取る玉…

…イヤア、」

と一つ掛けた声が、たちまち切なそうに掠（かす）れた時よ。

（ハオ、イヤア、ハオ、イヤア、）霜夜を且つちる錦葉(もみじ)の音かと、虚空に響いた鼓の掛声。

（コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タッポポッポ）摺鉦(すりがね)入れた後囃子(あとばやし)が、遥(はるか)に交って聞えたは、先駆すでに町を渡って、前囃子の間近な気勢(けはい)。

が、座を乱すものは一人もなかった。

「船の中には何とお寝(よ)るぞ、苫(とま)を敷寝に、苫を敷寝に楫枕(かじまくら)、楫枕。」

玉を伸べたる脛(はぎ)もめげず、ツト美津は、畳に投げて手枕(たまくら)した。

その時は、別に変った様子もなかった。

多一が次第に、歯も軋(きし)むか、と声を絞って、
「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りてまた冴(さ)ゆる、しばし曇りてまた冴ゆる、しばし曇りてまた冴ゆる……」
ト袖を捲いて、扇子(おうぎ)を翳(かざ)し、胸を反らして熟(じっ)と仰いだ、美津の瞳は氷れるごとく、瞬(またたき)もせず睜(みは)ると斉(ひと)しく、笑靨(えくぼ)に颯(さっ)と影がさして、爪立(つまだ)つ足が震えたと思うと、唇をゆがめた皓歯(しらは)に、莟(つぼみ)のような血を噛(か)んだが、烏帽子の紐の乱れかかって、胸に千条(ちすじ)の鮮血(からくれない)。
「あ、」
と一声して、ばったり倒れる。人目も振(ふり)も、しどろ

になって背(せな)に縋(すが)った。多一の片手の掌(てのひら)も、我が唇を圧(おさえ)余って、血汐(ちしお)は指を溢(あふ)れ落ちた。

一座わっと立騒ぐ。階子(はしご)へ遁(に)げて落ちたのさえある。引仰向(ひきあおむ)けてしっかと抱き、

「美津(みい)さん！……二、二人は毒害された、お珊、お珊、御寮人、お珊め、婦(おんな)！」

二十八

「床几(しょうぎ)、」

と、前後(まえうしろ)の屋台の間に、市女(いちめ)の姫の第五人目で、お

珊が朗かな声を掛けた。背後（うしろ）に二人、朱の台傘を廂（ひさし）より高々と地摺（じずれ）の黒髪にさしかけたのは、白丁扮装（はくちょうでたち）の駕籠（かご）人足。並んで、萌黄紗（もえぎしゃ）に朱の総（ふさ）結んだ、市女笠を捧げて従ったのは、特にお珊が望んだという、お美津の爺（じい）の伝五郎。

　印半纏（しるしばんてん）、股引（ももひき）、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じとりの地に据えた床几に、お珊は真先（まっさき）に腰を掛けた。が、これは我儘（わがまま）ではない。練（ねり）ものは、揃って、宗右衛門町のここに休むのが習（ならい）であった。

　屋台の前なる稚児（ちご）をはじめ、間をものの二間（けん）ばかりずつ、真直（まっすぐ）に取って、十二人が十二の衣（きぬ）、色を勝（すぐ）った

南地の芸妓(げいこ)が、揃って、一人ずつ皆床几に掛かる。

台傘の朱は、総二階一面軒ごとの緋(ひ)の毛氈(もうせん)に、色映交(さしか)わして、千本(ちもと)植えたる桜の梢(こずえ)、廓(くるわ)の空に咲かかる。白の狩衣、紅梅小袖、灯(ともしび)の影にちらちらと、囃子の舞妓、芸妓など、霧に揺据(ゆりすわ)って、小鼓、八雲琴(やくもごと)の調(しらべ)を休むと、後囃子(あとばやし)なる素袍の稚児が、浅葱桜(あさぎざくら)を織交ぜて、すり鉦(がね)、太鼓の音(ね)も憩う。動揺(どよめき)渡る見物は、大河の水を堰(せ)いたよう、見渡す限り列のある間、――一尺ごとに百目蠟燭(ひゃくめろうそく)、裸火を煽(あお)らし立てた、黒塗に台附の柵の堤を築いて、両方へ押分けたれば、練もののみが静まり返って、人形のように美しく且つ凄(すご)い。

ただその中を、福草履ひたひたと地を刻んで、袴（はかま）の裾を忙（せわ）しそう。二人三人、世話人が、列の柵摺（ず）れに往（ゆ）きつ還（かえ）りつ、時々顔を合わせて、二人囁（ささや）く、直ぐに別れてまた一人、別な世話人とちょっと出遇（であ）う。中に一人落しものをしたように、うろうろと、市女たちの足許（あしもと）を覗（のぞ）いて歩行（ある）くものもあって、大（おおき）な蟻の働振（はたらきぶり）、さも事ありげに見えるばかりか、傘さしかけた白丁どもも、三人ならず、五人ならず、眉を顰（ひそ）め口を開けて空を見た。

　その空は、暗く濁って、ところどころ朱の色を交えて曇った。中を一条（ひとすじ）、列を切って、どこからともなく

白気が渡って、細々と長く、遥に城ある方に靡く。これを、あたりの湯屋の煙、また、遠い煙筒の煙が、風の死したる大阪の空を、あらん限り縫うとも言った。

宵には風があった。それは冷たかったけれども、小春凪の日の余残に、薄月さえ朧々と底の暖いと思ったが、道頓堀で小休みして、やがて太左衛門橋を練込む頃から、真暗になったのである。

鴉は次第に数を増した。のみならず、白気の怪みもあるせいか、誰云うとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の数が一人多い。すべて十三人あると言交わす。

世話人徒が、妙に気にして、それとなく、一人々々

数えてみると、なるほど一人姫が多い。誰も彼も多いと云う。

念のために、他所見（よそみ）ながら顔を覗（のぞ）いて、名を銘々に心に留めると、決して姫が殖（ふ）えたのではない。定（おきて）の通り十二人。で、また見渡すと十三人。

……式の最初、住吉詣（もうで）の東雲（しののめ）に、女紅場で支度はしたが、急にお珊が気が変って、社（やしろ）へ参らぬ、と言ったために一人俄拵（にわかごしら）えに数を殖（ふ）やした。が、それは伊丹幸（いたこう）の政巳（まさみ）と云って、お珊が稚（わか）い時から可愛がった妹分。その女は、と探ってみると、現に丸官に呼ばれて、浪屋の表座敷に居ると云うから、その身代りが交っ

たというのでもないのに。……
それさえ尋常（ただ）ならず、とひしめく処に、搗（か）てて加えて易からぬは、世話人の一人が見附けた――屋台が道頓堀を越す頃から、橋へかけて、列の中に、たらたら、たらたらと一雫（ひとしずく）ずつ、血が落ちていると云うのである。

二十九

一人多い、その姫の影は朧（おぼろ）でも、血のしたたりは現に見て、誰が目にも正（まさ）しく留った。
灯の影に地を探って、穏（おだやか）ならず、うそうそ捜（さがし）もの

をして歩行(ある)くのは、その血のあとを辿(たど)るのであろう。

消防夫(しごとし)にも、駕籠屋にも、あえて怪我をしたらしいのはない。婦(おんな)たちにも様子は見えぬ。もっとも、南地第一の大事な市の列に立てば、些細(ささい)な疵(きず)なら、弱い舞妓も我慢して秘(かく)して退(の)けよう。

が、市に取っては、上もなき可忌(いまわ)しさで。

世話人は皆激しく顰(ひそ)んだ。

知らずや人々。お珊は既に、襟に秘(かく)し持った縫針で、裏を透(とお)して、左の手首の動脈を刺し貫いていたのである。

ただ、初(はじめ)から不思議な血のあとを拾って、列を縫っ

て検（しら）べて行（ゆ）くと、静々（しずしず）と揃って練る時から、お珊の袴の影で留ったのを人を知った。

　ここに休んでから、それとなく、五人目の姫の顔を差覗（さしのぞ）くものもあった。けれども端然としていた。黛（まゆずみ）の他に玲瓏（れいろう）として顔に一点の雲もなかった。が、右手（めて）に捧げた橘（たちばな）に見入るのであろう、寂（さみ）しく目を閉じていたと云う。

　時に、途中ではさもなかった。ここに休む内に、怪しき気のこと、点滴（したた）る血の事、就中（なかんずく）、姫の数の幻に一人多い事が、いつとなく、伝えられて、烈（はげ）しく女どもの気を打った。

自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる姫は皆、斉(ひと)しくお珊が臨終の姿と同じ、肩のさみしい風情となった。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚児だ――と叫ぶ――柵の外の群集(ぐんじゅ)の波を、鯱(しゃち)に追われて泳ぐがごとく、多一の顔が真蒼(まっさお)に顕(あらわ)れた。

「お呼びや、私をお知らせや。」

とお珊が云った。

伝五爺(じじい)は、懐を大きく、仰天した皺嗄声(しわがれごえ)を振絞って、

「多一か、多一はん――御寮人様はここじゃや。」と喚(わめ)く。

早や柵の上を蹌踉(よろ)めき越えて、虚空を掴(つか)んで探した

のが、立直って、衝と寄った。

が、床几の前に、ぱったり倒れて、起直りざまの目の色は、口よりも血走った。

「ああ、待遠な、多一さん、」

と黒髪揺ぐ、吐息と共に、男の肩に手を掛けた。

「毒には加減をしたけれど、私が先へ死にそうでな、幾たび目をば瞑ったやろ。やっとここまで堪えたえ。も一度顔を、と思うよって……」

丸官の握拳が、時に、瓦の欠片のごとく、群集を打ちのめして掻分ける。

「傘でかくしておくれやす。や、」と云う。

台傘が颯（さつ）と斜めになった。が、丸官の忿怒（ふんぬ）は遮り果てない。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗ろうとするのを、一目見ると、懐中（ふところ）へ衝（つ）と手を入れて、両方へ振って、扱（しご）いて、投げた。既に袋を出ていた蛇は、二筋 電（いなずま） のごとく光って飛んだ。

わ、と立騒ぐ群集（ぐんじゅ）の中へ、丸官の影は揉込（もみこ）まれた。一人渠（かれ）のみならず、もの見高く、推掛（おしかか）った両側の千人は、一斉に動揺（どよみ）を立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫ぶ。茶屋揚屋（あげや）の軒に余って、土足の泥波を店へ哄（どっ）と……津波の余残（なごり）は太左衛門橋、戎橋（えびすばし）、相生橋（あいおいばし）に溢（あふ）れかかり、

畳屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鴉が蔽（おお）いかかって、人の目、頭（かしら）に、嘴（はし）を鳴らすを。

お珊に詰寄る世話人は、また不思議にも、蛇が、蛇が、と遁惑（にげまど）うた。その数はただ二条（ふたすじ）ではない。

屋台から舞妓が一人倒（さかさま）に落ちた。そこに、めらめらと鎌首を立て、這いかかったためである。

それ、怪我人よ、人死（ひとじに）よ、とそこもここも湧揚る。

お珊は、心静（しずか）に多一を抱いた。

「よう、顔見せておくれやす。」

「口惜（くちおし）い。御寮人、」と、血を吐きながら頭（かぶり）を振る。

「貴方(あんた)ばかり殺しはせん。これお見やす、」と忘れたように、血が涸(か)れて、蒼白(あおじろ)んで、早や動かし得ぬ指を離すと、刻んだように。しっかと持った、その脈を刺した手の橘の、鮮血(からくれない)に染まったのが、重く多一の膝に落ちた。

男はしばらく凝視(みつ)めていた。

「口惜いは私こそ、……多一さん。女は世間に何にも出来ん。恋し、愛(いと)しい事だけには、立派に我ままして見しょう。

宝市のこの服装(なり)で、大阪中の人の見る前で、貴方(あんた)の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴(け)て見しょう、と命

をかけて思うたに。……先刻（さっき）盞させる時も、押返して問うたもの、お珊、お前へ心中立や、と一言いうてくれはらぬ。

　一昨日（おととい）の芝居の難儀も、こうした内証があるよって、私のために、堪（こら）えやはった辛抱やったら、一生にたった一度の、嬉しい思いをしようもの、多一さん、貴下（あんた）は二十（はたち）。三つ上の姉で居て、何でこうまで迷うたやら、堪忍しておくれや。」

　とて、はじめて、はらはらと落涙した。

　絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度（ひとたび）は頷（うなず）いたが、

「私は、私は、御寮人、生命（いのち）が惜（おし）いと申しません。

可哀気に、何で、何で、お美津を……」
　と聞きも果さず……
「わあ、」と魂切る。
伝五爺の胸を圧えて、
「人が立騒いで邪魔したら、撒散かいて払い退きようと、お前に預けた、金貨銀貨が、その懐中に沢山ある。不思議な事で、使わいで済んだよって、それもって、な、えらい不足なやろけれど、不足、不足なやろけれど、……ああ、術ない、もう身がなえて声も出ぬ。
　お聞きやす、多一さん、美津さんは、一所に連れずと、一人活かいておきたかった。貴方と二人、人は交

ぜず、死ぬのが私は本望なが、まだこの上、貴方にも美津さんにも、済まん事や思うたによってな。違うたかえ、分ったかえ、冥土(めいど)へ行てかて、二人をば並べておく、……遣瀬(やるせ)ない、私の身にもなってお見や。」

幽(かすか)ながらに声は透(とお)る。

「多一さん、手を取って……手を取って……離さずと……――左のこの手の動く方は、義理やあの娘(こ)の手をば私が引く。……さあ、三人で行こうな。」

と床几を離れて、すっくと立つ。身動(みじろ)ぎに乱るる黒髪。髻(もとどり)ふつ、と真中(まんなか)から二岐(ふたすじ)に颯(さっ)となる。半ばを多

一に振掛けた、半ばを握って捌（さば）いたのを、翳（かざ）すばかりに、浪屋の二階を指麾（さしまね）いた。

「おいでや、美津さんえ、……美津さんえ。」

練ものの列は疾（と）く、ばらばらに糸が断（き）れた。が、十一の姫ばかりは、さすが各目（てんで）に名を恥じて、落ちたる市女笠、折れたる台傘、飛々（とびとび）に、背（せな）を潜（ひそ）め、顔（おもて）を蔽（おお）い、膝を折敷きなどしながらも、嵐のごとく、中の島籠（こ）めた群集（ぐんじゅ）が叫喚（きょうかん）の凄（すさま）じき中に、紅（くれない）の袴一人々々、点々として皆留（とど）まった。

　と見ると、雲の黒き下に、次第に不知火（しらぬい）の消え行く光景（ありさま）。行方も分かぬ三人に、遠く遠く前途（ゆくて）を示す、そ

れが光なき十一の緋の炎と見えた。

お珊は、幽(かすか)に、目も遥々(はるばる)と、一人ずつ、その十一の燈(ともしび)を視(み)た。

明治四十五（一九一二）年一月

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年3月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十四巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年3月10日発行
※誤植の確認には底本の親本を参照しました。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年11月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。